

ソデクネ遺跡

—団体営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書—

2 0 0 3

長岡市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、新潟県長岡市柄吉町字村下にあるソデクネ遺跡発掘調査の記録である。
- 2 ソデクネ遺跡の発掘調査は、団体宮上地改良組合は場整備事業（柄吉北部地区）計画に伴って平成14年度に実施した。
- 3 発掘調査は、は場整備事業主体者のJA越後ながおかから委託を受けて長岡市教育委員会が実施した。
- 4 発掘調査にかかる経費は、JA越後ながおかと長岡市が費用負担契約に基づいて、は場整備事業経費の農家負担分に相当する割合を長岡市が国庫補助金と県費補助金の交付を受けて負担し、農家負担外の割合分をJA越後ながおかが負担した。
- 5 ソデクネ遺跡発掘調査の体制は次のとおりである。

調査主体者　長岡市教育委員会（教育長　笠輪春彦）

調査担当者　胸形敏朗（長岡市教育委員会職員）

調　　査　　員　小熊博史（長岡市教育委員会職員）

調　　査　　員　鳥居美栄（長岡市教育委員会職員）

事　　務　　局　長岡市教育委員会科学博物館

なお、発掘調査の支援業務を株式会社大石組に委託した。委託業者の選定は指名競争入札による。

- 6 発掘調査で出土した遺物及び測量図面並びに写真等は、長岡市教育委員会が保管している。
- 7 出土遺物に出土位置などを記入する記号は、ソデクネー取り上げ番号一大グリッド一小グリッド（若しくは遺構番号）—出土層序の順である。
- 8 本書は、図版の作成から本文の執筆まで、胸形が調査員・整理作業員の補助を受けて行った。
- 9 挿図の地形図等で方位の記入がないものは、真北を図の上にそろえた。また、遺構平面図の方位は真北を指す。遺構断面図の水平線脇の数字は標高（単位：メートル）を示している。
- 10 遺構の断面図中の数字は、土層序を示す数字で、土層序の凡例は次のとおりである。
1 = 黒褐色土、2 = 黑褐色土+黄褐色土、3 = 黑褐色土+炭化物、4 = 黑褐色土+黄褐色土+炭化物、
5 = 黄褐色土（地山土）、6 = 黄褐色土+黑褐色土、7 = 極色土、8 = 黒色土、9 = 炭化物、10 = 白色粘土ブロック+黑褐色土、11 = 黄褐色土+白灰色土+黑褐色土（井戸跡に特徴的なもの）
- 11 遺構は種別ごとに記号を用いて一連番号を付した。なお、小ピットは大グリッドごとで、建物跡の柱穴は各建物跡のピット番号とした。
S B = 握立柱建物跡、S A = 構造、S D = 溝跡、S E = 井戸跡、S K = 土坑（墓穴と思われるものを含む）、S I = 堪穴状遺構、T P = 落とし溝、S X = 不整形なプランの遺構などを含む性格不明の遺構、P = ピット
- 12 発掘調査から報告書の作成まで、次の機関や方々から御指導、御協力をいただきました。心からお礼を申し上げます。
関雅之、鶴巻康志、戸根与八郎、水澤幸一、三ツ井朋子、柄吉町は場整備協議会（会長　藤井弥一）

目 次

第1章 ソデクネ遺跡の発掘調査	1
1 調査に至るまで	1
2 調査の経過	1
3 調査区の設定	2
4 地理的環境	4
5 歴史的環境	4
第2章 繩文時代のソデクネ遺跡	6
1 遺構	6
(1) 打製石斧	6
(2) 繩文土器	6
2 遺物	6
(1) 屋敷跡	6
(2) 建物跡	9
(3) 土坑	9
(4) 井戸跡	10
3 遺構	11
(1) 珠洲焼	11
(2) 越前焼	11
(3) その他の陶磁器	12
(4) 木製品	12
(5) 石製品	13
第4章 まとめ	14
報告書抄録	16

図 版 目 次

- 第1図 調査グリッド図（1/2,500）
第2図 ソデクネ遺跡および周辺の中世遺跡群（1/50,000）
第3図 ソデクネ遺跡周辺の地形および中世遺跡群（1/20,000）
第4図 屋敷跡全体図（1/200）
第5図 屋敷跡内遺構（1）第4号・第5号建物跡
第6図 屋敷跡内遺構（2）第3号建物跡、竪穴状遺構
第7図 屋敷跡内遺構（3）土橋付近図、堀断面図
第8図 屋敷跡内遺構（4）横列1-1・1-2
第9図 屋敷跡内遺構（5）横列付近建物跡1・2
第10図 屋敷跡内遺構（6）井戸跡
第11図 屋敷跡内遺構（7）土坑
第12図 建物跡 第1号・第2号建物跡
第13図 土坑、落とし溝
第14図 井戸跡（1）
第15図 井戸跡（2）
第16図 井戸跡（3）
第17図 井戸跡（4）
第18図 出土遺物（1）縄文土器、打製石斧、珠洲焼（1）
第19図 出土遺物（2）珠洲焼（2）
第20図 出土遺物（3）越前焼（1）
第21図 出土遺物（4）越前焼（2）
第22図 出土遺物（5）土師質土器、瓦質土器、天目、瀬戸・美濃焼、白磁、中国青花、染付
第23図 出土遺物（6）木製品
第24図 出土遺物（7）砥石、石皿、石臼、鉄滓
第25図 遺構全体図（1/200）

写 真 図 版 目 次

- 写真1 ソデクネ遺跡空中写真（西上空から、遺構全体写真）
- 写真2 屋敷跡周辺の空中写真（西上空から、屋敷跡全体写真）
- 写真3 屋敷跡内遺構空中写真（柵列付近、堅穴状遺構）
- 写真4 遺構空中写真（屋敷跡2、土坑）
- 写真5 ソデクネ遺跡発掘調査（柄吉城跡、ソデクネ遺跡遠景=北西から・北東から・普濟寺から、表土除去作業、遺構確認作業、遺構発掘作業）
- 写真6 遺物出土状況など（縄文土器 = Ⅷ C - P 66、白磁 = VI D - P 40、珠洲焼 = V D - P 1、石臼 = S D19、発掘風景 = SK 13、土層断面 = SK 13、高脚小僧の発掘、高師小僧）
- 写真7 遺構（1）屋敷跡内の遺構（第3号建物跡、柵列1、土橋、土橋と門？、堅穴状遺構、堅穴状遺構の発掘風景、越前焼出土状況 = SK 2、SE 17）
- 写真8 遺構（2）落とし溝 = 平面・断面、第2号建物跡 = 平面・柱材、SK 14、第1号建物跡、SK 15 = 平面・断面
- 写真9 遺構（3）井戸跡（1） = SE 5 = 平面・断面、SE 6 = 平面・断面、SE 25・36、SE 2、SE 20、SE 7
- 写真10 遺構（4）井戸跡（2）足架けのある井戸跡 = SE 30平面・東壁、SE 8南壁、SE 24東壁、SE 33南壁、SE 34東壁、SE 9東壁・西壁
- 写真11 出土遺物（1）縄文土器、打製石斧、珠洲焼（1）
- 写真12 出土遺物（2）珠洲焼（2）、越前焼（1）
- 写真13 出土遺物（3）越前焼（2）
- 写真14 出土遺物（4）土師質土器、瓦質土器、天目、瀬戸・美濃焼、白磁、中国青花、染付
- 写真15 出土遺物（5）木製品
- 写真16 出土遺物（6）砥石、石皿、石臼

第1章 ソデクネ遺跡の発掘調査

1 調査に至るまで

ソデクネ遺跡は、平成12年度に実施した団体営ほ場整備事業（柄吉第二地区）計画（事業主体：越後ながおか農業協同組合。以下「J Aながおか」と言う。）に伴う遺跡確認調査で新たに確認された遺跡である。

遺跡確認調査は、周知の遺跡である村下遺跡のほかに、ソデクネ、タテノコシ、ジッショウイン、タチアガリなど柄吉城や普済寺にまつわる寺院の実相寺が訛ったと思われる地名の箇所を対象に実施した。確認調査の結果、ソデクネで中世・16世紀代の遺物（珠洲焼・越前焼・瓦質土器など）と、井戸跡と堀跡らしい遺構を確認し、消極的であるもののソデクネは遺跡であると考えた。だが、ソデクネ以外の村下遺跡を含む調査対象地からは1点の遺物・遺構も確認されず、遺跡と認定するには至らなかった。

長岡市教育委員会（以下「市教委」と言う。）は確認調査の結果を事業主体のJ Aながおかに伝え、事業計画と遺跡の保存方法一現状保存・盛土保存・記録保存一を考慮したほ場整備事業の設計を行うように求めた。また、ソデクネ遺跡の状況は新潟県教育委員会にも連絡し、記録保存を選択した場合の発掘調査の方法などについて協議を行った。

遺跡の保存方法は、遺物の出土量や遺構の分布が希薄なことなどから発掘調査を行って遺跡の情報を記録として保存することで、事業主体のJ Aながおか、および新潟県教育委員会と調整がついた。また、発掘調査の方法としては、遺物が極めて少ないとバワーシャベルで地山まで掘り下げて地山面で遺構を確認し、検出した遺構を発掘することで新潟県教育委員会の指導を得た。

なお、柄吉地区ではほ場整備事業などの諸問問に伴う遺跡の発掘調査は、昭和60年度に国道352号線の改良工事（バイパス工事）での三貫梨墳墓から始まり、これまでに三貫梨館跡・松葉遺跡・中道遺跡、それに埋蔵鏡の下道遺跡の5遺跡で発掘調査を行った。中道は縄文時代が主体の遺跡であるが、調査を実施した5遺跡は中世の遺跡群であり、いずれも柄吉川沿岸に位置している。それに対し、ソデクネ遺跡は、柄吉川から離れた柄吉本村の北端で、山城の柄吉城跡や中世以来の法灯を伝える普済寺の門前下に位置しており、16世紀代と考えられるソデクネは古志長尾氏の柄吉城に関連する遺跡である可能性を探ることも調查目的の一つとして発掘を実施した。

2 発掘調査の経過

ソデクネ遺跡の発掘調査は、文化庁と農林水産省との覚書に基づいて事業主体であるJ Aながおかと発掘調査費の費用負担契約を締結すること、および発掘調査を円滑に進めるための労務管理や現場管理などの支援業務を土木工事を主とする事業所に委託することから始まった。支援業務委託は長岡市財務部契約検査課を通じて指名競争入札で落札した株式会社大石組と契約した。

6月17日に調査事務所の設置、調査機材の準備等を行い、19日に調査機材を事務所に搬入する。20日から発掘調査現場でバワーシャベルによる表土除去作業を開始する。合わせて事務所内の整理などの調査準備作業を進める。表土除去作業は、遺跡確認調査で遺物の出上が極めて少ないとから、遺構確認面の地山面までバワーシャベルで掘り下げて遺構を確認することが、新潟県教育委員会と協議した方針である。

そして、6月26日に作業員全員が集合して人力による発掘に着手する。26日は発掘調査に当たっての注意事項の伝達や発掘調査の手順などの説明を行い、その後に現場での発掘を開始したが、発掘開始後まもなくの降雨のため、当日の発掘作業は午前で終了した。実際に人力による発掘調査には入ったのは28日か

らであった。なお、発掘調査は次の手順で進めていった。

- ①パワーシャベルで遺構確認面（地山面）までの表土除去作業
- ②ジョレンを使っての遺構確認作業
- ③確認した遺構に石灰でマーキングし、遺構の平面形を平板測量（縮尺 = 1/40）

この作業は遺物出土の遺構に番号をつけることや、調査の進ちょく状況を確認するために効果があった。

- ④遺構の発掘（遺構のうち、必要な土層観察と写真撮影及び実測）
- ⑤遺構の測量（基本的には 1/40）

この作業は個別の遺構を測量することが目的で、現場作業員が調査員の指示のもとに測量する。

- ⑥発掘調査地全体の空中写真（業者委託）
- ⑦発掘調査遺構全体の測量（業者委託）

原則的に上記の手順で発掘調査を進めたが、調査の過程で遺物の出土状況、遺構の平面や土層断面など調査に必要な記録用写真の撮影などは必要のつど行った。調査グリッドの基本杭は、遺構の位置確認や遺構断面・平面測量などに使用することが主な目的であること、パワーシャベルの表土除去作業の障害となることから、表土除去作業の大半が終了した範囲から順次基本杭を打設することにした。今回の調査では 7 月 5 日から 20m ピッチで打設を開始した。基本杭には標高点もあわせて設置しておき、土層断面の実測等に使用した。

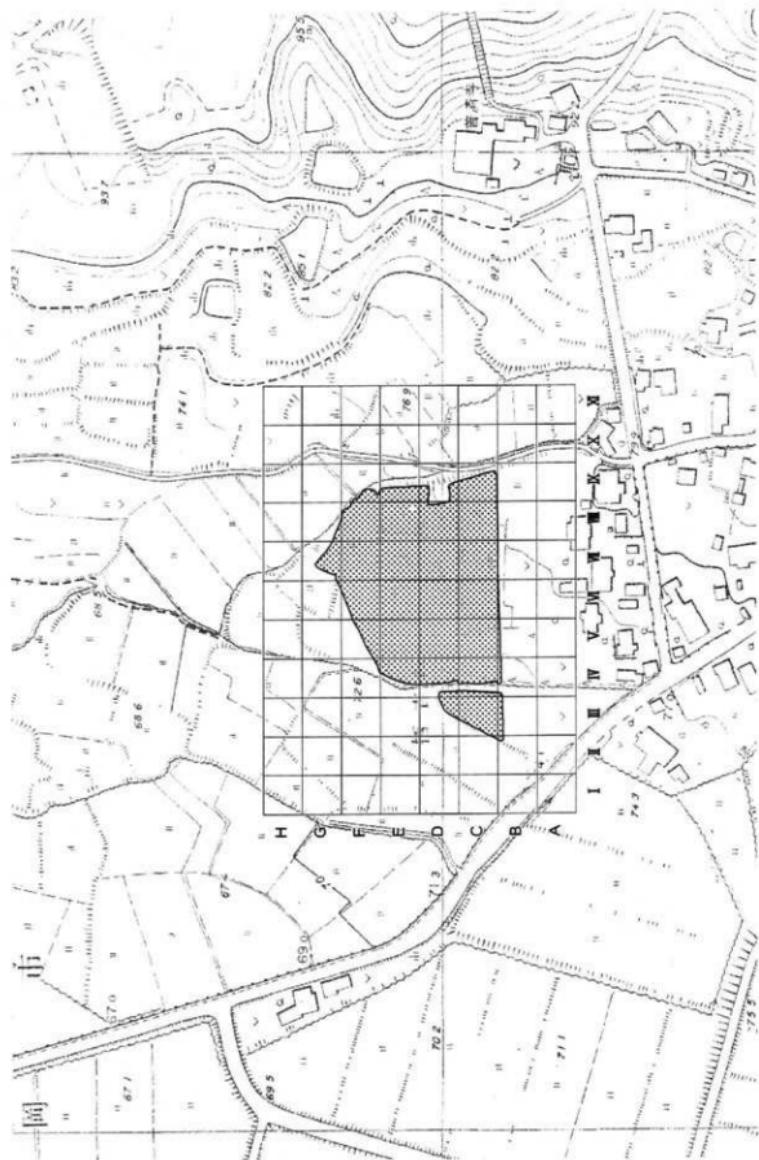
遺構の確認作業は、7 月 5 日には幅約 1.5m 前後で北西で折れ曲がる溝—後日屋敷跡と認識した周囲を巡る堀の一端を確認し、17 日には 1 間 × 3 間の掘立柱建物跡を 2 棟確認、23 日には VC・VIC で縄文時代の落とし溝に近い形状の溝を確認するなど 7 月に入つてから本格化ていった。そして、7 月 24 日から遺構の発掘に着手する。遺構の発掘のうち、井戸跡の発掘については危険防止の上から現場代理人と協議を行つて深さ 2 m 程度、もしくは水が湧いた段階で発掘を終了することにした。堀で囲まれた屋敷跡内遺構の発掘は 8 月 9 日から開始する。屋敷跡内には掘立柱建物 3 棟、方形竪穴 1 基、井戸跡 3 本などが主な遺構として存在している。8 月下旬には遺構の再確認作業のため、地山面のジョレン削り作業を進める。

9 月 4 日に、ラジオコントロールヘリコプターによる遺跡の空中写真撮影をする。撮影に備えて前日までに遺構を明確化するために遺構の縁に石灰でマーキングする。そして、9 月 20 日までに測量等の作業も終了し、調査機材や図面類等を現場事務所から整理室に撤収する。

3 調査区の設定（第 1 図）

ソテクネ遺跡の現況は畑地と水田である。ほ場整備事業の造成計画では現地形を削平する箇所と、盛土工法を採用する箇所があり、一見して遺跡の保存につながるようである。だが、この工法は耕作土を剥ぎ取つてから搬入土などで盛土をしてから再度耕作土を被せるもので、遺物包含層や遺構の上部を削平する恐れがある。このため、確認調査で推定した遺跡の範囲で、ほ場整備事業で現状を変更する範囲を本発掘の対象地とした（第 1 図）。調査対象地は、人家に近い東西線を南側の限界とし、東側は普済寺との間に入っている沢を、北と西側は確認調査の成果で推定した遺跡の境界線に囲まれた約 9200m²を対象とした。

調査グリッドは、遺跡南西の任意の位置に原点を置き、原点から真北を X 軸とし、それに直交する東西軸を Y 軸として 20 × 20m を大グリッド、さらに大グリッドを 2 × 2 m に細分して小グリッドとして設置した。グリッドの名称は、大グリッドの X 軸を A・B・C …、Y 軸を I・II・III …、小グリッドの X 軸を a・b・c … j、Y 軸を 1・2・3 … 10 とし、呼称は VD-8 f などとした。



第1図 調査グリッド図 (1/2500)

4 地理的環境

長岡市はほぼ中央部を北流する信濃川で東西に大きく二分され、東には魚沼丘陵から続く標高700m級の通称「東山丘陵」が南北に連なり、西には東頭城丘陵からの西山丘陵が控えている。信濃川左岸の西側には県境の津南町から続く日本最大級の河岸段丘が発達し、馬高・三十稻場（縄文中・後期）や、岩野原（縄文中・後期）、藤橋遺跡（縄文晚期）など、新潟県を代表する縄文時代の集落跡が所在している。それに対し、信濃川右岸では河岸段丘の発達は顕著でなく、東山丘陵から信濃川へ流れ出る太田川や柄吉川などの小河川が山麓から沖積地への出口付近で扇状地を形成している。そして、東山丘陵沿いには縄文遺跡は少なく、横山（弥生後期）、五斗田（弥生後期から古墳前期）、麻生田古墳群、中道（中世）などの水田耕作開始後の弥生時代から中世にかけての遺跡が多数所在している。

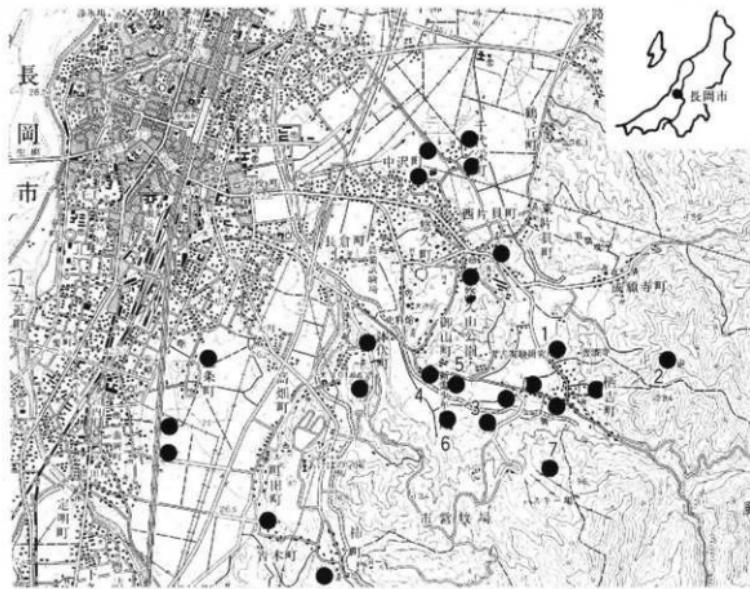
ソデクネ遺跡が所在する柄吉地区は信濃川右岸で、東山丘陵を源流とする柄吉川に沿って南東から北にかけて、東山丘陵の裾をまくように展開している。そして、集落の東側で柄吉神社と普濟寺に挟まれたところを谷頭とする沢が南から北にかけて入りこみ、西には悠久山と挟まれたところに柄吉川による扇状地が開けている。ソデクネは柄吉集落の北端で、遺跡の北側で合流する西の扇状地と、東の沢で挟まれた舌状に張り出した台地の先端部に位置している。ソデクネの現況は畑地と水田であるが、水田は主に遺跡北西側に広がっており、水田造成のために畠地から続く傾斜面の旧地形を止めていない。標高は東の高いところのⅨ C で約79m、低い西側のⅢ C では約74m、そして水田造成で削平された V・VI F では約73mで、南東から北西に向かって傾斜している。その標高差は5~6 mを測る。

5 歴史的環境

ソデクネ遺跡の主な時代・時期は、出土土器から中世一室町時代の後半期に相当する15世紀終わりごろから16世紀中ごろである。柄吉地区における中世の主な動きは、1342~45年の康永年中の「普濟寺は臨清宗で、格式は諸山、住職は別伝妙胤と伝える」の記事から始まる。普濟寺は通称「文明年間の検地帳」に記載された内容から、柄吉を中心に広範囲に勢力を誇っていた寺院である。その普濟寺の勢力を真追させるようなかたちで柄吉に進出したのが古志郡司長尾氏で、時期は15世紀終わりごろ若しくは16世紀初めと考えられている。長尾氏はソデクネ遺跡の東に位置する柄吉城を拠点に、16世紀後半の御館の乱で滅亡するまで古志郡を統治していた。古志長尾氏の滅亡後に替わって柄吉に入ったのが河田長親で、上杉景勝が会津に団替えとなった16世紀末までには河田氏も滅亡し、柄吉の中世が終わりを告げる。

この中世の柄吉地区で発掘調査した遺跡は、下道古銭出土地、三貴梨墳墓・館跡、松葉、中道の5ヶ所である。下道は14世紀中ごろに一万枚以上の渡米銭を埋蔵していた遺跡で、三貴梨墳墓・館跡、松葉、中道は下道より時間が下る15世紀代の集落や墳墓群などの遺跡である。いずれも柄吉川沿岸に位置する遺跡でもある。これらの遺跡と普濟寺および古志長尾氏の動向については、広井造氏が中道遺跡の報告書で触れたように、柄吉川沿岸地域の中道・三貴梨・松葉遺跡は普濟寺の安定期にあたり、真退・廃絶期は古志長尾氏の柄吉進出・入部時期と対応している。それに対し、ソデクネは柄吉川沿岸から離れ、集落の北端で普濟寺から柄吉城へ通じる地理的な位置を占め、時間的にも沿岸地域の遺跡が真退し廃絶する古志長尾氏が柄吉に進出して、柄吉城を拠点に活動し、御館の乱で滅亡するまでの間に相当する。

なお、ソデクネは長岡市史ではタテノコシの地名に接して方100mの畑地があり、普濟寺から柄吉城へ通じる場所であることなどから、古志長尾氏が柄吉に入る以前の志賀氏が城主であった時代の武士居館と考えられている。ソデクネの発掘調査は、この点からも調査目的としたのである。



第2図 ソデクネ遺跡および周辺の中世遺跡群（1/50000 長岡）

- 1 ソデクネ遺跡 2 栢吉城跡 3 中道遺跡 4 三貫梨墳墓 5 三貫梨館跡 6 松葉遺跡
7 下道理藏鏡出土地



第3図 ソデクネ遺跡周辺の地形および中世遺跡群（1/20000）

第2章 繩文時代のソデクネ遺跡

主に調査対象地の南側一集落寄りの地域で、落とし溝1基、打製石斧1本と縄文土器数点が出土した。

1 遺構（第13図 写真8）

検出位置はVC～VI Cで、形状は平面形が細長い溝状を呈し、断面は開口部が少し広くて底部が狭く、深い薬研状となっている。規模は長さ3.6m、開口部の幅30～50cm、底部の幅10cm、深さ80cmほどである。遺構内部に遺物は出土せず、遺構の時間的なことは不明であるが、形状が縄文中期の馬高遺跡で集落の縁辺部に相当する位置で確認された落とし溝に類似すること、検出位置周辺から縄文土器が出土したことから、縄文時代の遺構と考えた。

2 遺物（第18図 写真11）

(1) 打製石斧

円刃の両刃の打製石斧が1本、VI Cの井戸跡（SE 7）覆土から出土した。長さ91mm、幅36mm、重量59gの短圓形である。

縄文時代の石器としては上記の打製石斧だけであるが、井戸跡（SE 22）から出土した石皿（第24図97）も中央部に研磨痕が認められ、縄文時代の石器の可能性がある。

(2) 縄文土器

縄文早期後半の表裏条痕土器（1）が1点と、後期の深鉢形土器が4点（2～5）出土している。条痕土器は鐵錐混入の土器で、集落寄りのⅤ C - P 66の覆土出土である。

2は口縁部に1条の沈線を巡らして口縁に刻みを施す縁帶土器で、後期前半の南三十稻場式土器である。3は縦方向に数条の沈線を施したやはり南三十稻場式土器と思われ、他の縄文土器も器壁や施文されている縄文の特徴などから後期の土器と考えられる。

第3章 中世のソデクネ遺跡

ソデクネ遺跡の主体をなす時期である。畠地と西側のⅢ C周辺の水田で掘立柱建物跡や土坑、堀跡、それに井戸跡などが、水田の造成で旧地形が削平されたIV～VI E・Fでは井戸跡が確認された。

1 遺構

(1) 屋敷跡（第4図～第11図 写真2・3・7）

遺跡東側では方軸にそって方形に巡る堀跡と、その間に開まれた中にある建物跡などで構成される遺構群を仮に「屋敷跡」とした。屋敷跡内の遺構は、掘立柱建物跡3棟、土坑8、井戸跡1本、それに柱穴列（もしくは横列）などである。屋敷跡は北東側に位置し、東から西への傾斜地に存在している。

①堀跡（第4図・第7図 写真2・7）

屋敷跡を区画するように巡る堀の規模は、西堀（SD 18・19）で約48m、北堀（SD 20）で約44m、南堀（SD 14・22・17）で約46m、東堀は沢に下る崖面を代替施設としている。堀の規模や形状などは開墾等の影響などによって各堀ごとに異なる。保存状況が比較的良好であるSD 18・19では、上端120～156cm、下端44～60cm、深さ38～50cmの箱形が基本の掘り方で、南北の堀に比べて整然と掘り込まれている。また、SD 18・19は南側約1/3の位置で360cmの間隔を置いて堀がSD 18とSD 19に分かれて途切れ、その箇所での立ち上がりは四角く整形されており、土橋の様相を呈している。土橋付近には柱穴と思われるビット

が數本存在する。その中で東側で210cmの距離を置いて土橋とほぼ平行に並ぶ2本の柱穴が、直径約40cm、深さ61~65cmとほぼ同じであること、および2本の柱穴の中心点と土橋の中間点とがほぼ同じ位置にあることなどから、この2本の柱穴は2本柱の門の可能性があると考えられる。南北の堀は東から西へ下る傾斜面に掘り込まれており、特に上端60~78cm、深さ12~24cmと浅くて狭いSD14・SD22・SD17の3本の堀に途切れているが、これは開墾などで上端が削除された結果であると思われる。また、SD20は上端88~116cm、下端24~36cmと、堀の幅は西のSD18・19に近いが、深さが15cmほどで浅く、SD20も開墾でかなり削平されているものと考えられる。

なお、屋敷跡を区切る3本の堀（南・北・西堀）以外に、屋敷跡内の東側で南北方向の堀らしい遺構（SD33）がある。SD33は屋敷を区画する堀とは異なり、SD33の西側に位置する横列との関係が高いものと思われ、横列の箇所で触れることにする。

②建物跡（第4~6図 写真2・7）

SD33と西堀とのほぼ中間に3棟の掘立柱建物跡—SB3・4・5が位置している。SB4・5は重複し、SB3は4・5と近接した位置にあることから、この3棟の建物は時期が異なるものと考えられる。それぞれの建物跡の規模は、SB3が梁間1間（4.24m）×桁行き4間（8.12m、1間=約2m）、SB4は梁間1間（4.56m）×桁行き4間（7.26m、1間=約1.80m）、SB5は梁間1間（4.3m）×桁行き3間（6.6m、1間=約2.2m）である。柱穴の平面規模は直径30~45cm、深さはSB3が30~67cmと深いが、SB4・5は10cm内外のものもあり、かなり浅い。これも開墾等による削平の結果と思われる。なお、SB3のP4から土製の埴堀（第22図72）が1点と、越前焼の擂鉢（第21図62）の破片がP10から出土しているが、時期は不詳である。

③土坑（第4・6・11図 写真2・3・7）

屋敷跡内には堅穴状遺構（SI1）と円形の土坑（SK2）、それに長方形の土坑（SK11・12）などがある。SI1は4×4.6mのやや南北に長い長方形の土坑で、深さは浅いところで40cm、深いところで80cmほどの規模を持つ。掘り方はほぼ箱型で、底面に柱穴などの施設はない。底面に近い位置から珠洲焼の壺（第18図15）、越前焼の擂鉢（第21図67）と壺（第20図37）、中国青花の茶碗（第22図83）、それに重量760gの鉄滓（第24図103）が出土している。越前焼の壺は、SI1から出土した肩の破片が、東に位置する円形の土坑（SK2）出土の口縁部破片と接合され、同一時期に投棄されたものと考えられる。遺物の時期は珠洲焼の壺がIV期からV期の14世紀末から15世紀初め、越前焼の壺は16世紀前半、中国青花はC群に分類される茶碗で16世紀中ごろのものである。

SI1は平面の形や掘り方、それに規模などから堅穴住居跡に類似した様相が見られるが、柱穴や火を焚いた痕跡が認められない。柱穴を持たないことは屋根を架けた施設一例えれば住居などではないと推察されるし、火を焚いた痕跡もないことも住居などの施設でないことを示すものであり、現時点では遺構の性格は不明である。

SI1出土の越前焼と接合する資料が出土したSK2は、覆土及び底面から同一個体と思われる越前焼の壺の破片（第20図43~47）が多数出土した遺構である。平面形は隅丸方形に近い円形で、深さ10cmほどの浅い土坑である。越前焼の壺の口縁部から肩にかけての破片が、さらに破損して西のSI1とSK2に分かれたもので、遺構の性格を検討する材料に乏しい。

SI1の西側に位置する長方形の土坑（SK14）も、深さ20cmほどと浅い掘り方で、内部に施設がなく、さらには遺物の出土も見られることもあり、この土坑の性格も不明と言わざるを得ない。

また、S D33の東側には浅い長方形の土坑が2基並んでいた。SK11・12である。いずれの覆土も地山土と表土の黒褐色土が入り混じったものだけであり、掘ってから直ぐに埋めたものと考えられ、骨や副葬品などの痕跡は確認されないものの、墓の可能性がある。

S D33の東側には約150×130cmの円形、深さ20cmほどの土坑—SK13（第4図・第11図）がある。SK13の覆土は、炭混じりの炭化物だけで、小石から拳大の礫が混じっており、土坑の壁はガリガリの焼土である。壁がガリガリに焼けていることや、覆土に炭化物が充満していることなどから火を焚いた土坑であることだけは認識されるが、1点の遺物もなく土坑の性格を検討する材料は極めて乏しい。SK13を検出した当初は農具あるいは武器などの鉄製品を生産した小鍛冶のような施設を想定したが、鉄滓やフイゴなど小鍛冶造構に伴う遺物はなく、現時点では性格不詳の遺構である。また、時代・時期を探る土器などの遺物もないこと、それにS D33の外側に位置することなどから、屋敷跡内の施設でないことやソデクネの主な時代である中世の範疇に含まれない可能性もある。

④井戸跡（第4図・第10図 写真2・7）

屋敷跡内には7本の井戸が位置している。7本の井戸の位置は、建物跡に近接しているのがSE16・17の2本、屋敷跡東側のS D33の南縁にSE13・15の2本、南堀に近いところにSE9、南堀に接してSE10、西堀の南側に接しているのがSE19である。この位置関係からすると、屋敷に伴う井戸は建物跡に近接するSE16・17は確実性が最も高く、次いでS D33の縁にあるSE13・15で、南や西の堀に接しているSE10・19は屋敷跡の時期から外れるものと思われる。

建物跡に近いSE16・17はいずれも素掘りの井戸である。SE16は直径約150×160cm、深さ180cmで水が湧く。SE17は直径約110cmとSE16に比べて一回り小さく、約170cmの位置で水が湧き出した。水が涌き出た位置まででは遺物は2本とも出土しなかった。SE17は深さ1.5mの位置で、焼土と炭化物が厚さ5cmほどで南側に広がり、北側には平らな川原石が位置していた。この焼土などは投げ込まれたものと考えられる。

S D33の縁辺に近いSE13は直径約135cmの円形素掘りで、115cmほど下がったところで、井戸を掘るのを放棄したかのように地山土となる。上部の覆土は一括で埋められたような地山土と表土の黒褐色土との互層となっていた。SE13の西側に位置するSE15は開口部の直径が130cmほどであるが、2mほど下がった湧水となるところでは直径が2mを超える、内部で膨らむ構造となっている。また、SE15の西と東の壁に足がかり用の穴が4段にみられた。南の堀に近いSE9は1m足らずの直径と井戸の中ではかなり小さい。南の堀にかかるSE10も開口部直径が1mにも満たない小さいもので、2m近くの位置で水が湧き出た。西の堀にかかるSE19は開口部直径1mほどの大きさであるが、深さ1mほどで底面の地山に到達する浅い土坑である。井戸跡としたのは、他の土坑と比べて開口部が大きいこと、掘削の途中で放棄した井戸が見られることなどから、井戸跡の範疇に入れた。なお、堀に近接（SE9）もしくは堀にかかる井戸（SE10・19）は屋敷跡内の施設ではない可能性が高いと思われる。

⑤構列（第4・8・9図 写真2・3・7）

堀に囲まれた屋敷跡内東側3分の1のところに南北に掘り込まれたSD33があり、その西側に柱穴が並んでいる箇所で4例ほどの構列と建物を想定した。

SA1-1は直径80cm～1m、確認面からの深さ55cm～1mであるが、標高ではほぼ同じ位置に底面がくる6本の柱穴を結んだ構列で、4.6mの間隔を置いて南北にそれぞれ3本ずつ並んでいる。南北それぞれの柱間距離は約2.2mで、3本の距離はいずれも4.3mほどと等間隔である。ほぼ同じ規模の柱穴で、柱間間

隔などが等しいことから横列の一例であろうと考えられる。なお、S A 1 - 1 の P 51 から越前焼の壺の破片が 1 点出土している。

S A 1 - 2 は S A 1 - 1 の東側の柱穴と S D 33 に接する S A 1 - 1 より規模の小さい柱穴を結んだもので、柱穴は南北に 3 本ずつと東側に張り出して並んでいる。柱穴の直径は 35~65cm ほどで、深さは 30~80cm ほどである。そして、南北の 3 本ずつで並ぶ柱間は 148cm と 210cm で等間隔ではないが、東への張り出で柱穴と外側の柱穴はいずれもほぼ同じで、さらに外側の柱間もほぼ等間隔である点で、横列の一形態と考えた。

建物跡は、梁間 1 間（3.7m）、桁行き 1 間（4.6m）の建物で、それに S A 1 - 2 で想定した横列の東側張り出しの柱穴列を取りこんだ縁がつく形態（S A 1 - S B 1 - 2）と、縁を持たない形態（S A 1 - S B 1 - 1）の 2 形態を想定した。建物跡はまた、横列の S A 1 - 1 と建物とを組合せた施設の可能性もある。例えば、東側からの防衛として望楼を持つ門などの施設である。また、この屋敷跡内でも高いところに位置して S D 33 に近接する建物は、屋敷跡内のほぼ中央部に位置する S B 3・4・5 が日常生活の場と考えられるのに対し、何か特別な施設の可能性が指摘される。

（2）建物跡（第12図 写真 8）

これまでには屋敷跡の記述をしてきたが、屋敷跡以外で確認された建物跡などの遺構をここで取り上げる。遺構は建物跡、井戸跡、土坑などがある。

調査地の西側のⅢ C・D で掘立柱建物跡が 2 棟確認された。北側の S B 1 は直径 30~40cm、深さ 50~80cm ほどの柱穴で、梁間 1 間（柱間 5.4m）× 桁行き 2 間（5m = 柱間 2.5m）の建物を構成する。

南側の S B 2 は梁間 2 間（5.4m = 柱間 2.65m）で、桁行きが東が 2 間（7m = 柱間 3m）、西が 3 間（7m = 1.8・2・2.2m）と変則的な柱穴の配置に、北側に柱間 1.2~1.5m の間隔をおいた 4 間の縁がつく建物跡である。S B 2 の柱穴（P 2）には柱材が立ったままで出土した（第23図91）。遺物は P 4 からは珠洲焼の壺（R 種）の破片を転用した筋砥石が出土している。

また、S B 1・2 の周辺には S E 11・12・14 の 3 本の井戸跡が所在する。建物に附属する施設の可能性が大きいが、S B 1 の南側桁行きに重なる S E 11 は少なくとも S B 1 の井戸ではないと言える。

（3）土坑（第13図 写真 8）

上坑は主に方形と円形の 2 形態で、方形の土坑は 9 基、円形は 2 基である。方形の土坑は、主に南東側のⅢ C に分布している。方形土坑は深いもので 30cm ほど、浅い土坑では 10cm そこそこと極めて浅く、覆土は表土の黒褐色土と地山の黄褐色土とが混じったものである。土坑を掘って直ぐに埋め戻したようなものである。方形土坑の規模は、小さい S K 7 で短軸 80cm × 長軸 196cm、大きい S K 1 は短軸 160cm × 長軸 350cm で、主に S K 6 のような規模の短軸 1m × 長軸 2m 以上のものが多い。方形土坑には S K 9 や 15 のような正方形に近い形態の土坑もある。方形土坑からは遺物の出土はなかった。

円形の土坑はⅢ C に位置する S K 4 と V D の S K 16 の 2 基である。S K 4 は約 150cm ほどの梢円形で、方形土坑が多数分布するⅢ C に位置し、土坑の深さや覆土の状況が方形土坑とはほぼ同じであり、方形土坑の仲間と考えられる。

方形土坑の分布域から 30m 以上の距離をおいた S K 16 は、115×85cm の梢円形を呈し、70cm ほどの深さを測る。方形土坑とは性格が異なるものと思われる。遺物は出土しない。

S K 16 のような規模ではないが、珠洲焼の壺の胴下半部が直立した状態で出土したピットが西側の V D にある（V D - P 1）。ピットの規模は柱穴に近いもので、付近には建物を想定できなかったが、多数の柱

穴が分布しており、P 1 も柱穴と思われる。壺はピットの中ほどに底面が位置する状態であった。意識的に埋められたものか、あるいは偶然であるのかは不明である。意識的な行為であれば、経年などを納めて壺全体をピットに入れたことなども想定されるが、壺が破損した状態であることやピットの中ほどに位置することから、偶然の結果と考えるほうが素直のように思える。

(4) 井戸跡 (第14~17図 写真8~10)

今回の調査で確認・発掘した井戸跡は、屋敷跡内の7本を含めて37本が調査地全体に広く分布していた。特に水田造成のため、表土から地山深くまで削平されて柱穴などの遺構は検出されないⅣ・V-D・E、V・VI-Fの地域では井戸跡だけが10本以上確認され、水田造成で井戸跡以外の遺構はすでに削平されている中で、井戸跡の分布から遺跡の広がりを伺わせるものがあった。なお、井戸の発掘は作業員の安全確保などから現場代理人と協議して水が涌き出た位置、もしくは深さ2mほどの位置で止めた。

ソデクネで発掘された井戸跡は、井戸枠などの施設は確認されず、いずれも円形の素掘りで、そのうちの11本に、壁に昇降用に足を架ける穴（窪み）を掘ってある「足架けの井戸」が確認された。S E 3・4・8・24・29・30・33と、屋敷跡内のS E 9・15などである。井戸跡の開口部の口径は平均1.2mで、その中で最大はS E 15の2.4×2mで、最小口径の井戸はS E 37の80×70cmである。そのうち、足架けのない井戸の平均口径は1.17m、足架けのある井戸の平均値は1.22mで、足架けのある井戸のほうが規模が若干大きい。

明らかに井戸を掘ることを途中で放棄した井戸が屋敷跡内に1本（S E 15）ある以外は、湧水の位置あるいは深さ2m以上での地山面まで掘り込まれている。発掘で底面まで確認できた井戸跡は、S E 19・26・34・36・37の5本で、屋敷跡内の西堀（S D 18）に接しているS E 19以外の4本は、V D・FとVI Fに位置しており、この地域が水田の造成で井戸以外の遺構が削平されたと考えられることは、井戸跡の状況からも裏付けられる。

井戸跡で遺物を出土したのは次のとおりである。

S E 2からは越前焼の壺（第20図49）、S E 5で珠洲焼の14世紀後半の片口鉢（第19図26）と壺（第18図12）と瀬戸・美濃焼の折口縁の深皿（第22図76）、S E 6は土師器の京系皿と瀬戸・美濃焼の茶碗それに中国青花の茶碗らしいもの、S E 7は16世紀前半の中国青花の皿（第22図80）、S E 8は土師器の京系皿、S E 13は越前焼の壺（第21図53）、S E 14は16世紀前半の越前焼の擂鉢（第21図59）、S E 18は15世紀前半の珠洲焼の壺（第19図17）と14世紀の壺（第20図40）を含む越前焼の壺（第20図41・42）と瀬戸天目それに建築部材と思われる木製品（第23図85）と比較的多くの遺物が出土しており、S E 20からは瀬戸・美濃焼の皿、S E 21は14世紀後半の珠洲焼の擂鉢（第19図27）、S E 23も14~15世紀代の珠洲焼の擂鉢（第19図28）、S E 24は越前焼の壺（第21図54）、S E 25は16世紀代の越前焼の擂鉢（第21図60・61）と石臼（第24図99~101）、S E 26は先端が尖った木製品（第23図92）、S E 27は珠洲焼の壺（第19図19）、S E 30は14世紀後半の珠洲焼の擂鉢（第19図29）、S E 33からは斎串（第23図88）が、S E 34は15世紀前半の珠洲焼の壺（第19図25）、擂鉢（第19図30）と越前焼の壺（第20図50）、中国天目茶碗それに曲げ物の蓋（第23図86・87）と側板（89）および建築部材もしくは圓錐裏の自在鉤と思われる木製品（90）である。

しかし、37本の井戸跡のうち、S E 1・4・9・16・17・26・29・32・35の10本からは、中世以外の遺物一近世・近代の土器（陶磁器）が出土した。近世・近代の遺物が出土した井戸はソデクネの主体的な時期である中世の遺構から除外されるものと考えられる。

2 遺物（第18図～第24図 写真11～16）

遺構出土の遺物については、これまでも記述してきたが、改めて中世にかかるソデクネ遺跡出土遺物をここで触ることにする。ソデクネで出土した中世の時間に属する遺物の種類と出土数量は、珠洲焼が壺など31点、越前焼は壺と擂鉢の57点、灯明皿もしくはカワラケの土師器が18点、瓦質土器5点、瀬戸・美濃焼が9点、瀬戸天目が5点の国内産陶磁器と、白磁7点、青磁5点、染付2点、中国青花9点、中国天目1点の中国磁器、曲物などの木製品が26点、および砥石や石臼などの石製品が17点である。

(1) 珠洲焼（第18・19図 写真11・12）

ソデクネの珠洲焼は、壺が8点、壺が12点、擂鉢が6点、片口鉢が5点の4器種、31点が出土した。珠洲焼は大半がIV期からV期の、14世紀後半から15世紀前半にかけて生産されたものである。7～14・17～20は珠洲焼の壺で、7・8は口縁部から肩にかけての破片、他は胴部の破片である。壺のうち、タタキ目の手法から9・14・17はV期の15世紀前半の所産で、他の壺もほぼ同じ時期のものと考えられる。なお、遺構出土の壺は、次のとおりである。9 (VD-P42)、10 (III C-P94)、11 (SD10)、12 (SE5)、14 (SD22)、17 (SE18)、19 (SE27)、20 (SD32)。

15・16・21～25は壺で、15は屋敷跡内の堅穴状遺構 (S I 1) から出土した壺の口縁部から胴部上半分にかけての破片で、口縁部が外方に若干張り出し、胴部の条痕状タタキ目がやや密に、面取り風に施されたIV期からV期の14世紀後半から15世紀前半の壺である。16は胴部下半分の破片で、VD-P1の覆土に直立の状態で出土したもので、近くのVD-P14から出土した24の胴部破片と同一個体の可能性が指摘される。時期はV期の15世紀前半である。15・16・24以外で遺構から出土した壺は、23 (SD19)、25 (SE34) で、時期は25がV期の15世紀前半である以外は、破片が細かいので不明であるが、ほぼ同時期のものとみなされる。

擂鉢 (27～31・34) や片口鉢 (26・32・33) で全体の器形が残っているものはないが、平らな口縁と握り目などの特徴からはIV期からV期の14世紀後半から15世紀前半のもので、IV期の擂鉢・片口鉢は26・27・29の3点で、残りはV期である。28は静止糸切り底の擂鉢である。26はSE5、27はSE21、28はSE23、29はSE30、30はSE34、32はSD19、33はSD20、34はSD22出土である。

なお、35は珠洲焼の壺R種を、36は越前焼の壺を、破損した後に、内面を筋砥石に転用したものである。35は建物跡のSB2-P4から出土したもので、IVからV期の所産である。36はIII C-P6出土。

(2) 越前焼（第20・21図 写真12・13）

越前焼は壺 (37～58) が48点、擂鉢 (59～67) が9点出土している。壺の大半は、やや直立に立ち上がる口縁に若干窪む平らな口唇部をもつ16世紀前半のものである。16世紀前半期のものが大半の越前焼にあって、40は頸部から肩にかけての破片であるが、N字状の受け口の口縁となると思われ、14世紀代の所産と考えられる。37の口縁部はSK2、肩はSI1と、破損して別個の遺構から出土したもので、16世紀前半の壺である。また、47の壺もSK2とSA1-1の別遺構出土の破片が接合されたもので、37は11m、47は16m離れた屋敷跡内にある別の遺構である。しかし、いずれもSK2から、接合した片方の破片が出土したことが注目される。言わば、SK2を基点に、堅穴状遺構のSI1と、横列などの性格を持つSA1-1-P51に破損した壺の破片が散らばり、この三ヶ所の遺構が同時期であることを示している。また、55・56に見られる外面に緑色の自然釉が垂れ下がっている破片は5点出土している。

図示したうちで37・47以外の壺で遺構出土は、次のとおりである。38 (SD32)、51 (SD19)、56 (SD21)、57 (SD20)、58 (SD14)、40～42 (SE18)、49 (SE2)、50 (SE34)、53 (SE13)、54 (S

E24)、43~46 (S K 2)、48 (III D - P 1)、52 (III C - P 1) であり、越前焼の壺はほとんどが遺構、それも井戸跡からの出土である。

ソデクネで出土した越前焼の擂鉢 (59~67) は、胴部の破片だけで、より詳細に時期区分できる口縁部や底部などの破片はないが、摺り目などの特徴から壺と同じ16世紀代の所産であると考えられる。擂鉢の出土位置は、59 (S E 14)、60・61 (S E 25)、62 (S B 3 - P 10)、63 (III E - P 112)、64 (V C - P 149)、67 (S I 1) と、遺構出土のものが多い。

(3) その他の陶磁器 (第22図 写真14)

国内産陶器の珠洲焼と越前焼以外の、土師質土器や青磁などソデクネ出土陶磁器をここにまとめた。種別と数量は前述のとおりである。

土師質土器 (68~71)

カワラケの類で、実測できないほどの小さい破片を含めて18点出土している。京系の皿が6点、他は在地系のカワラケである。68はS D 33からの出土で、在地化した京系のロクロ整形の皿で、口径20cmを超える大形品。色調は黒色を呈している。口縁が開いて平たい感じを受け、体部に一段の段が見られる。底部外面には刺突風の細かい窪みが中心部から外側に向かって放射状についている。おそらく、底部を整形したときの痕跡であろうか。71は京系のロクロ整形による皿で、68に比べて若干小形である。71にも整形の過程でついた体部の段がある。68は15世紀後半から16世紀初め、71は15世紀後半と思われる。70も京系のロクロ皿で16世紀初めごろか。内面から外面の縁にかけて炭化物がたっぷり付着しており、灯明皿として使用されたものである。69は在地系のロクロ整形の皿で、SD 18出土である。

瓦質土器 (72・73)

手炙りの破片が4点と埴輪の破片が1点出土している。72はてづくねの土器で、内面に2次焼成を受けたようで、白色の外面に比べて内面は灰色がかったり。2次焼成の痕跡が認められるところから埴輪の可能性が指摘される。屋敷跡内の建物跡-S B 3を構成する柱穴 (P 4) の出土。時期は不詳である。

73は黒色研磨された手炙りの口縁部破片である。内面はほぼ垂直に立ち上がり、外面は折り返し風に下方に少し重れ下がっている。そして、整形による外面には数条の凹線が引かれている。建物跡のS B 1・2が位置するIII Cの出土である。時期は15世紀後半から16世紀前半である。

天目 (74)

6点出土した天目のうち1点が中国天目で、他の5点は瀬戸焼の天目である。天目は図示した以外は破片実測すらできなかった。74は瀬戸天目で、口縁の外面に一条窪ませて、体部が若干膨らんで、削り出した高台に向かってすぼまる。釉薬は内面にびっしり、外面は体部の下部4分の1のところまでかかっている。釉薬の色調は茶色味をおびた黒色を呈している。なお、他の瀬戸天目の形状や釉薬の状況は74と同じで、15世紀末から16世紀初めの瀬戸・美濃焼の大窯1期の所産である。

なお、図化できなかった中国天目は、胎上の色調が灰色味をおびており、外面の釉薬が茶色で、内面の釉薬が茶色がかった黒色である。破片の箇所は外面の釉薬が途切れどころである。

瀬戸・美濃焼 (75・76)

ソデクネ出土の瀬戸・美濃焼は緑色を呈する釉薬がかかっているものが大半で、実測が可能な破片は2点しかない。75は緑色の釉薬を内外面にかけている丸碗で、外面には釉薬をかける前に上下に数条の沈刻が施されている。16世紀前後の大窯2期の所産である。なお、本資料は瓶に破損したあとを漆で接着している。SD 18出土である。

76は薄く釉薬をかけた深皿で、SE 5出土である。口縁部が大きく外反する折口縁で、口縁内部に一条の三角形状の隆起線を、体部の外面にもロクロ整形による数条の低い隆起線がみられる。大窯後IV期の15世紀半ばごろのものである。

白磁 (77・78)

7点出土しているが、実測ができた破片は2点である。いずれも重ね焼した皿の類で、内面の釉薬が高台にあたる部分で途切れている。釉薬は白濁色である。78の高台は77に比べて細い。77は中国産D群に属する白磁で15世紀前半期、78は16世紀前半である。

染付 (82)

染付はVI C - P 22と包含層から各1点ずつ出土している。いずれも茶碗と思われるもので、白濁色の生地の上にコバルト色の釉薬で文様が描かれている。82は包含層出土の染付で、内面に格子目柄などの文様が描かれている。小さい破片のために同化できなかったVI C - P 22出土のものは、外面に文様がある。時間は15世紀後半から16世紀前半期と思われる。

中国青花 (79~81・83・84)

染付のうち、中国から渡來の中国青花の類をここにまとめた。中国青花は9点出土している。そのうち、5点の破片が実測できた。器種は80が皿で、他は茶碗である。いずれも胎土は灰色みを帯び、白濁色の生地に、コバルトの釉薬で花の文様を描いている。皿の80は、口縁部が大きく外反しており、重ね焼の痕跡が高台に見られ、内面の底面には大きく開いた花が描かれ、外面には延びた蔓に花が描かれている。時期はB 1群の16世紀前半と考えられる。S E 7出土である。83・84は茶碗の口縁部破片で、堅穴状造構（S I 1）出土の83は、生地が他に比べて若干青みがかったり、外面の口縁部に平行する線を引いて、口縁との間に文様を描いている。断面左側の破損部に漆で接いだ痕跡が確認できる。時期はC群の16世紀中ごろである。84の外面には濃いコバルトで花びらのような文様を描いている16世紀前半のB 1群の茶碗である。81の茶碗は底部から胴部下半の破片で、高台には重ね焼の痕跡が見られる。時期は15世紀後半である。79は包含層出土の茶碗の底部破片で、16世紀前半である。

(4) 木製品 (第23図 写真15)

井戸跡や柱穴から柱材や建築部材などの木製品が出土している。特に井戸跡の底面近くまで掘り下げることができたS E 34からは曲げ物など、図示した大半の木製品が出土した。

85はS E 18出土の建築部材と思われるもので、ほぼ円形の丸木の下を組み合わせるように加工してある。柱材あるいは梁などと思われる。86・87・89・90はS E 31出土の木製品で、86・87は曲げ物の蓋あるいは底板で、89は曲げ物の圓板である。90は平らな板に穴を一箇所に穿ち、端部に三角形の抉り込みをいたれた部材で、圓孔裏の自在鉤のようでもある。88は蓋車で、S E 33出土。91は西側の建物跡（S B 2）の柱穴（P 2）に立ったままで出土した柱材である。上部が若干曲がっている。S E 26出土の92は、先端が尖り、他の方に焼けた痕跡が見られるものである。用途は不明である。

(5) 石製品 (第24図 写真16)

砥石が9点、石臼あるいは茶臼が6点出土している。図示した砥石は造構から出土したもので、中世の所産と考えられる。93はS D 25、94・95はピット、96はS E 33出土である。

石臼は井戸跡のS E 25から3点出土している（99・100・101）。99は茶臼のように内面が大きく窪んでいる。100・101は粉ひき臼の下臼である。S D 19出土の102は粉ひき臼の上臼である。98はS D 18から出土したもので、茶臼のようである。

第4章 まとめ

1 植吉地区的縄文時代

長岡市の東に位置する植吉地区では、これまで三貫梨墳墓、松葉遺跡、中道遺跡で中世の遺跡と重複して縄文時代の遺跡が発掘調査されており、今回発掘調査したソデクネ遺跡を加えると4ヵ所となる。植吉地区で最古の資料は松葉とソデクネの縄文時代早期後半の条痕土器で、次いで三貫梨墳墓の前期後半の土器があり、その後の中期は中道や三貫梨墳墓と松葉で、後期は中道、晚期は中道と三貫梨墳墓で出土例が確認されている。中でも中道は縄文中期から晚期に至るこの地域での拠点と考えられる集落跡で、松葉は遺跡の縁辺部にあたる地域での調査であり、今後の調査によっては植吉川を挟んで中道と対峙する集落跡の可能性を秘めている。

ソデクネ以外の中道・松葉・三貫梨墳墓は植吉川沿岸にある遺跡で、植吉集落の北側での調査例はソデクネが始めてである。ソデクネにおいて縄文遺物の出土位置は、集落寄りのところであること、集落の縁辺部に位置することが多い落とし溝が発見されたことなどから、ソデクネの主体部は集落内にあるものと思われる。そして、前述したように、植吉地区で発掘した縄文遺跡は、いずれも中世遺跡と重複している。これは縄文時代早期以来、植吉の地が縄文人や中世人たちにとって住みやすい条件を持っていることを示唆しているのではないか。

2 中世のソデクネ遺跡

ソデクネは未周知の遺跡であったが、地名が館などに通じるところから平成12年度に試掘・確認調査を行って発見された新遺跡である。今回の調査では南北48m、東西44mの範囲を幅1m前後の堀と東側の泥に落ちる崖で囲まれた屋敷跡と、建物跡や井戸跡などが珠洲焼や越前焼、それに瀬戸・美濃焼や青磁、白磁、染付などの遺物とともに発見された。ここでは、中世におけるソデクネ遺跡の性格と、植吉地区における中世遺跡を考えてみる。

①遺跡の時間

遺跡の性格を探る条件で欠かすことのできないことがらに遺跡の時間的な位置付けがある。ソデクネから出土した遺物のうち、時間を推定できるものは、珠洲焼や越前焼などの国産陶磁器、それに天目や中国青花などの渡来磁器などがある。珠洲焼はIV期からV期にかけての14世紀後半から15世紀前半期のものが多い。それに対し、越前焼はS E 18から出土したN字の受け口口縁の甕(40)が14世紀代であるが、それ以外は15世紀から16世紀前半期のものが大半を占めている。また、カワラケなどの土師質土器は15世紀後半から16世紀前半期のものが多く、瀬戸・美濃焼は15世紀半ばから16世紀前後であり、中国青花の生産時期は16世紀前半から中ごろである。ソデクネ出土の陶磁器の生産時期からすると、15世紀前後から16世紀前半期と考えられる。しかし、生産地が異なり、かつ時期も異なる陶磁器といえどもセットとして捉える場合は、陶磁器は縄文土器などと逆って伝世することが多いことなどを考慮して遺跡や遺構の時期を考えることが一般的である。この一般的な考えに立つと、ソデクネは16世紀前半期の越前焼が多く出土していること、16世紀前後の瀬戸・美濃焼が出土していることなどから、出土した陶磁器の大半が16世紀前後であることや、越後にあっては甕や擂鉢などの日常雑器の主体性が珠洲焼から越前焼に取って代わる時期が16世紀と考えられている点も考慮すると、16世紀前半期がソデクネの主体的な遺跡であると考えられる。

②遺構の性格について

ソデクネで確認された遺構は、南北48m×東西44mの範囲を幅1m前後、深さ1m近い堀が南北と西側の三方を巡り、東側は沢に落ちる崖で囲まれた屋敷跡と、建物跡や溝、井戸、墓穴らしい土坑、それに柱穴らしいビットである。屋敷跡は遺跡の北東側に位置し、建物跡は西側、溝は集落寄りの南側に、井戸は建物跡や溝後の付近と水田造成で削平された北側に、墓穴らしい土坑は東側に、そしてビットは集落寄りの南から北にかけて分布していた。すでに水田造成のため削平されて井戸跡しか確認されない北側や、溝やビットなどが多数確認された集落寄りの地域についても、屋敷跡のような総合的に遺構を捉えることができないため、ここでは主として屋敷跡について考える。

北東側に位置して堀などに囲まれた屋敷跡は、建物跡が3棟、竪穴状遺構、土坑、井戸跡などで構成されている。屋敷内での各遺構の配置は、西の堀が途切れる土橋の存在と東側が沢に面していることなどから西側を出入り口、ほぼ中央部にある3棟の重複する建物と近接する2本の井戸、出入り口に近い南西の一角に竪穴状遺構（S I 1）とその並びに浅い円形の土坑（S K 2）と方形の土坑（S K 14）、そして屋敷の東側の高いところに溝と柵列が位置している。さらに溝の外側には墓と考えられる土坑がある。この遺構の配置から中央部の建物は、位置や井戸を持つところから母屋と考えられる。建物は東側の溝（S D 33）の柵列（S A 1）にも1棟の存在が想定される（S A 1-S B 1）。この建物は中央部の建物に比べて小形であることや、位置が傾斜地上部の東側に偏っていることなどから母屋などの居住空間とは異なる特別な施設と思われる。また、柵列と仮定した6本の柱穴の平面と深さは、建物跡の柱穴に比べて大きい。5本の柱穴は建物跡を挟む箇所で柱間が他より広くなっているが、他の2間ずつの柱間はほぼ同じであること、および高みに開まれた位置で、溝に平行するところから柵列の可能性は少なからずあると思われる。そして、この柵列は東側の門を構成するものとも考えられ、柵列と建物を合わせて考えると、東門に附属する望楼のような施設とも想定できる。

③まとめにかえて

さて、堀を巡らした屋敷の主な性格を次に探ってみたい。屋敷跡の遺構と屋敷跡内の包含層から出土した遺物は、珠洲焼の甕・壺・擂鉢、越前焼の甕と擂鉢、土師質の皿の日常雑器に混じって、瀬戸・美濃焼の丸碗、中国青花の茶碗などがある。中国波来の青花や青磁、それに瀬戸・美濃焼の茶碗の存在から、農民クラスなどではなく、それなりの格式を備えた人物である可能性を否定できない。しかし、香炉や仏華瓶などの出土を見ないことから寺院の可能性はないものと思われる。また、出土遺物からソデクネの中世は16世紀前半期を主とする時期で、15世紀終わりから16世紀初めに古志郡司の長尾氏が蔵王堂城から拠点を柄吉に移した時期とほぼ重なる。時期のことや出土遺物の内容それに屋敷の規模などから、屋敷の主は古志長尾氏に関係する人物、地位の高くない被官クラスと思われる。

さて、長岡市教育委員会は柄吉地区において、三貫梨墳墓、三貫梨館跡、松葉遺跡、中道遺跡、下道埋納錢遺跡の中世遺跡を発掘調査してきた。この5遺跡はいずれも柄吉川沿岸に位置する14世紀半ば（下道埋納錢遺跡）と15世紀中ごろの遺跡（下道以外の遺跡）で、古志郡司の長尾氏が柄吉に拠点を移す前の遺跡群である。そのころは、普濟寺の勢力が高波保を中心に勢力を誇っていた時期でもある。そこへ普濟寺の勢力を追うように入ったのが長尾氏である。ソデクネ遺跡は普濟寺から長尾氏に地城の勢力が移った時期に相当する長尾氏の被官クラスの屋敷跡などである。このことは、長尾氏が柄吉に拠点を移す前まで15世紀中ごろを中心とする柄吉川沿岸地域に展開していた集落や館それに墳墓などの遺跡が、柄吉城の麓に集結し、城下を形成したことを物語っていると言えよう。

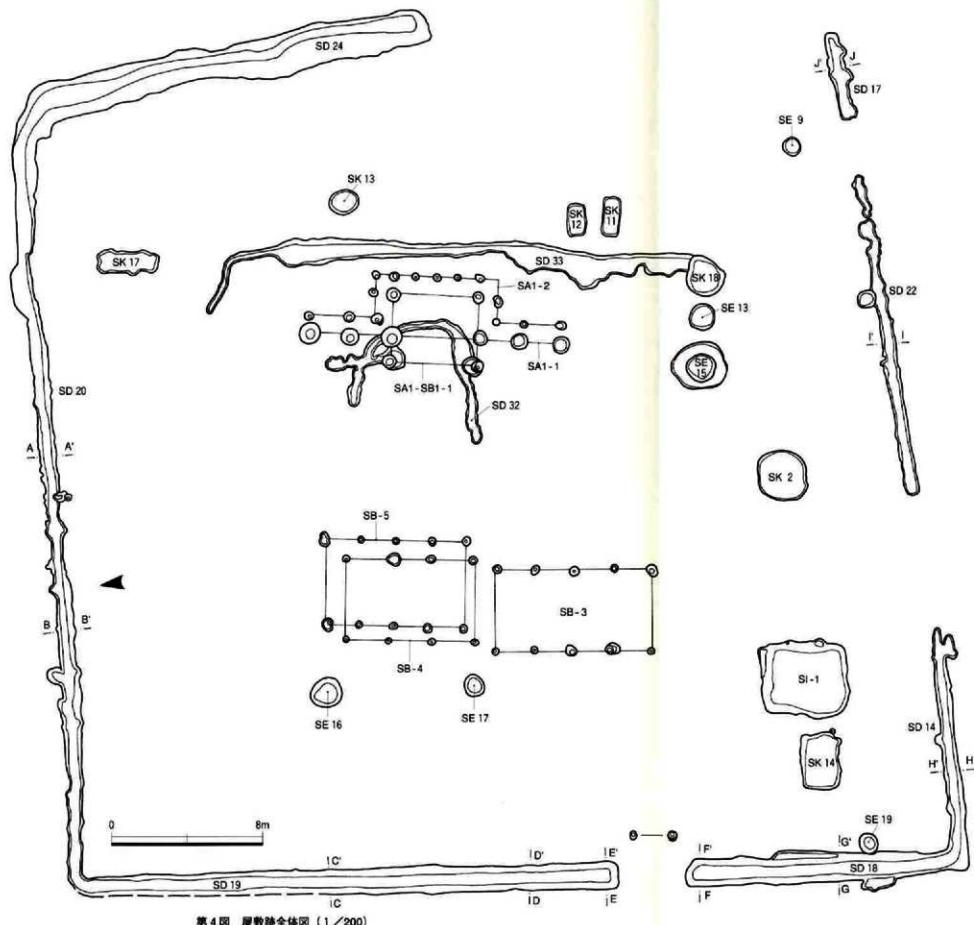
報告書抄録

ふりがな そでくねいせき							
書名	ソデクネ遺跡						
副書名	団体営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	駒形敏朗						
編集機関	長岡市教育委員会(担当:科学博物館)						
所在地	〒940-0072 長岡市柳原町2-1						
発行年月日	2003年3月14日						
所収遺跡名	所 在 地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ソデクネ	長岡市柏原町 字村下2780外	15202	37° 25'34"	138° 53'44"	2002年 6月17日～ 9月20日	9,220	団体営ほ場 整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
ソデクネ	館跡	中世	屋敷跡(堀・建物 跡・竪穴状遺構・ 井戸など)	珠洲焼、越前焼、瀬戸 ・美濃焼、瀬戸天目、 中国青花などの陶磁器 建築部材などの木製品、 石臼など			

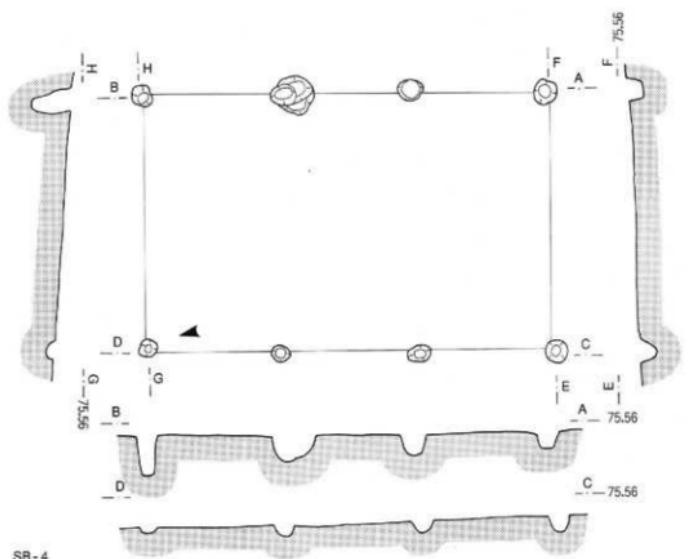
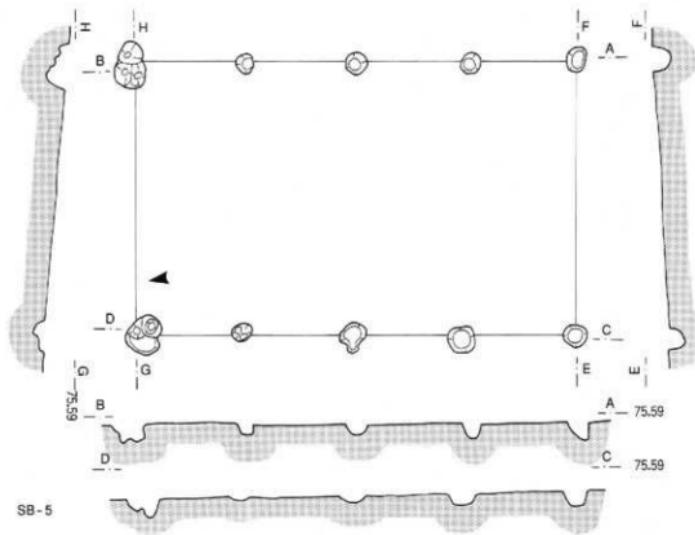
ソデクネ遺跡 一団体営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書一

平成15年3月14日発行

発行:長岡市教育委員会 印刷:(株)中央印刷

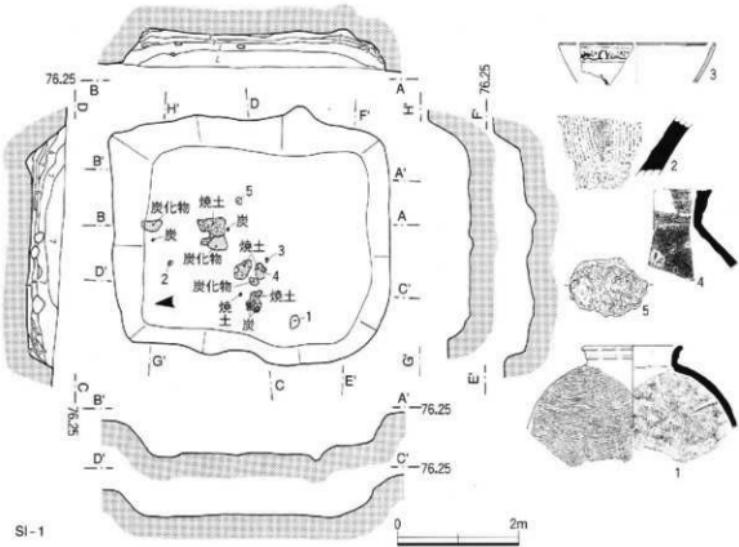
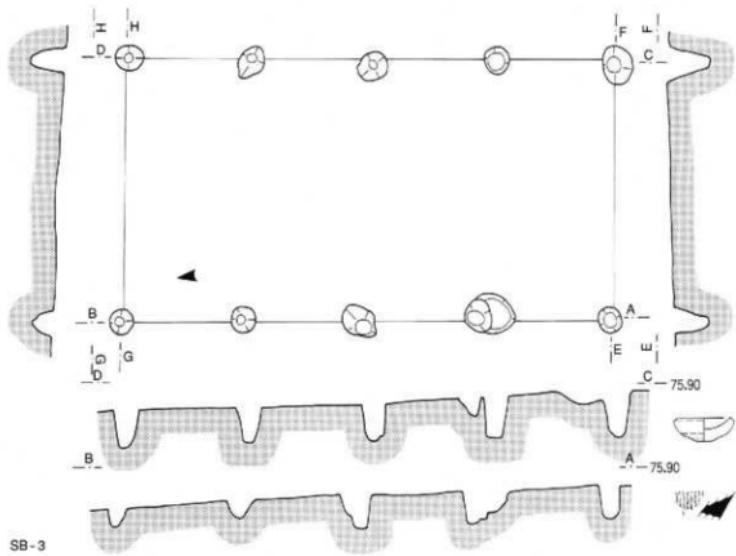


第4図 屢數脉全体図 (1/200)

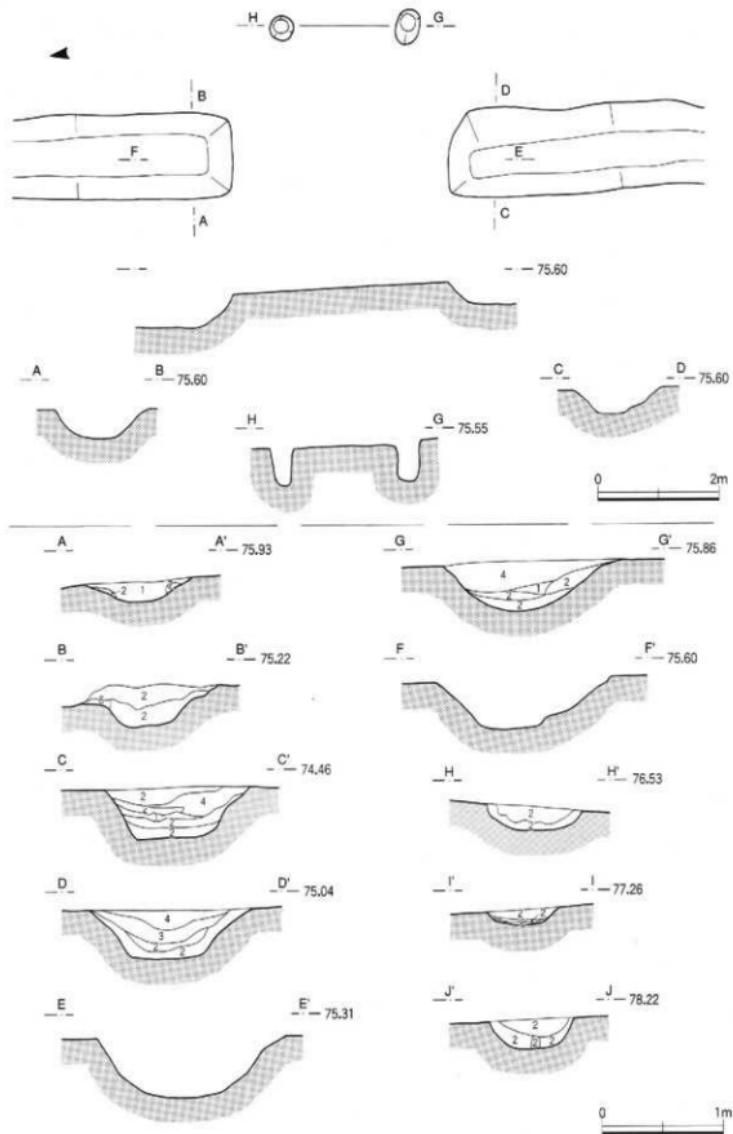


0 2m

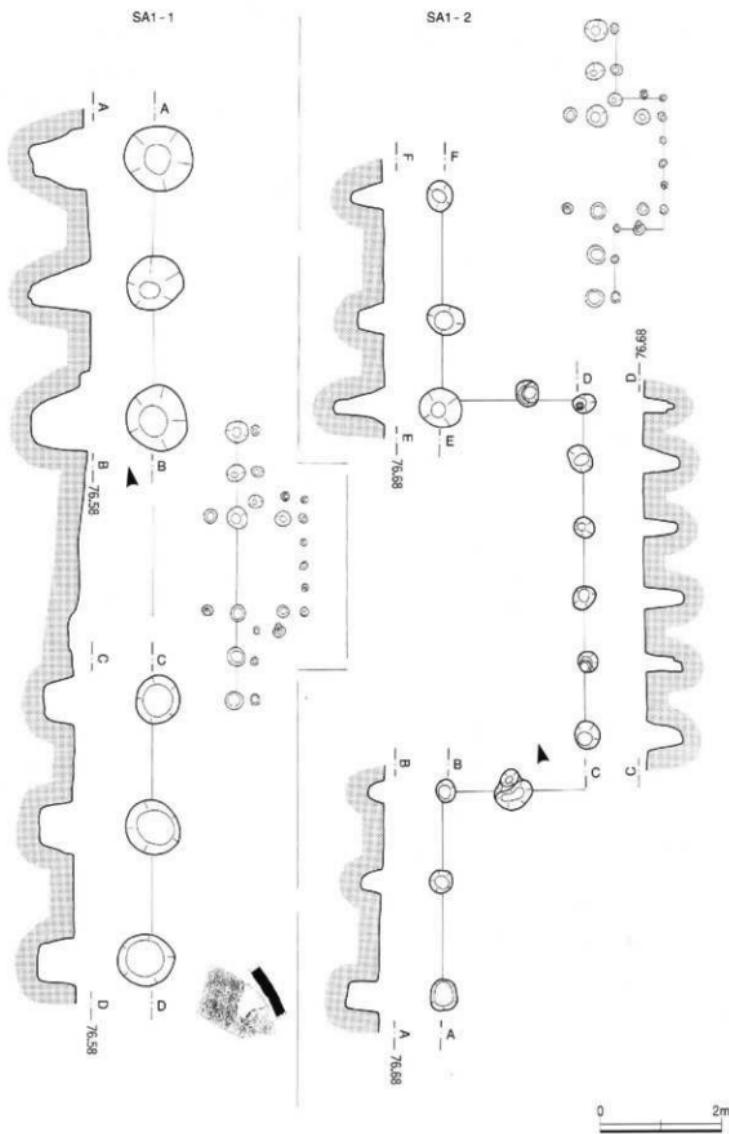
第5図 屋敷跡内造構(1) 第4号・第5号建物跡



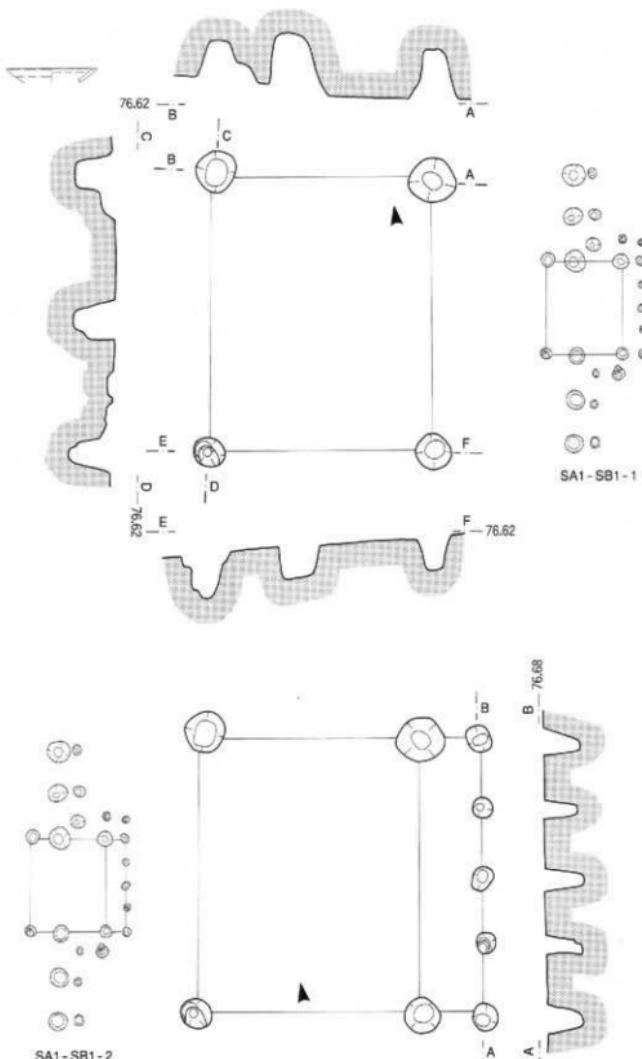
第6図 屋敷跡内遺構(2) 第3号建物跡、竪穴状遺構



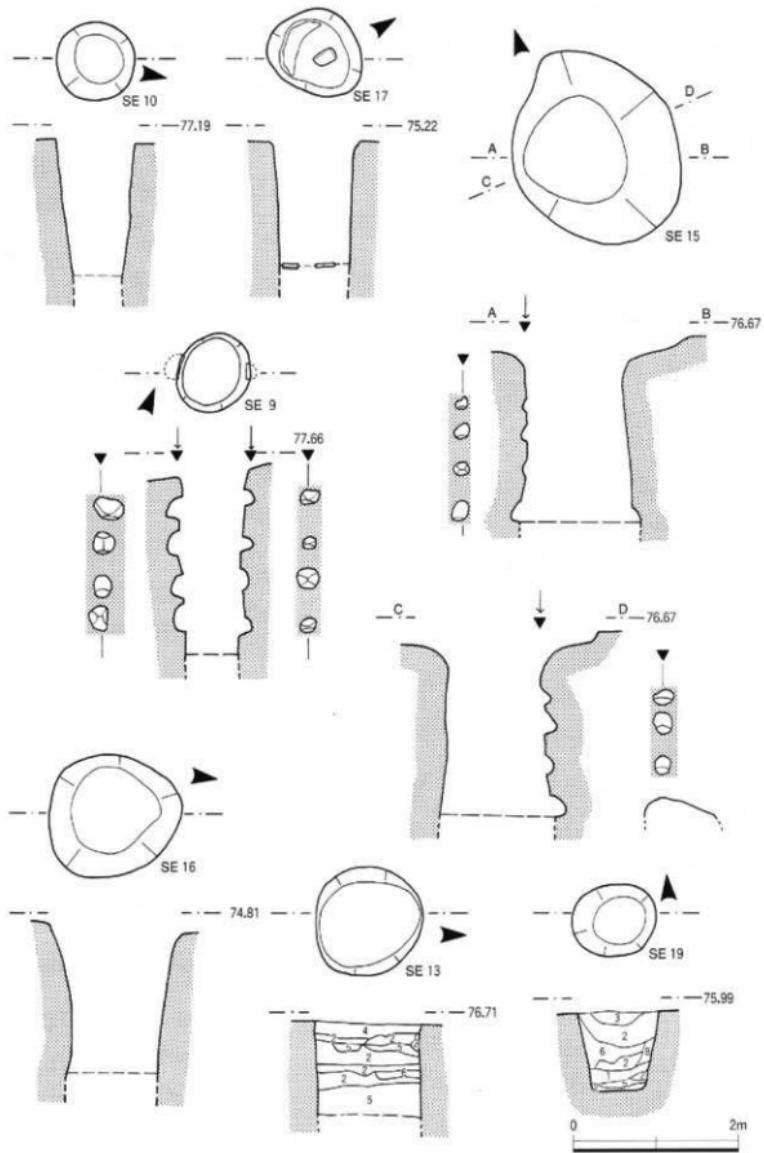
第7図 屋敷跡内造構(3) 土橋付近図、堀断面図



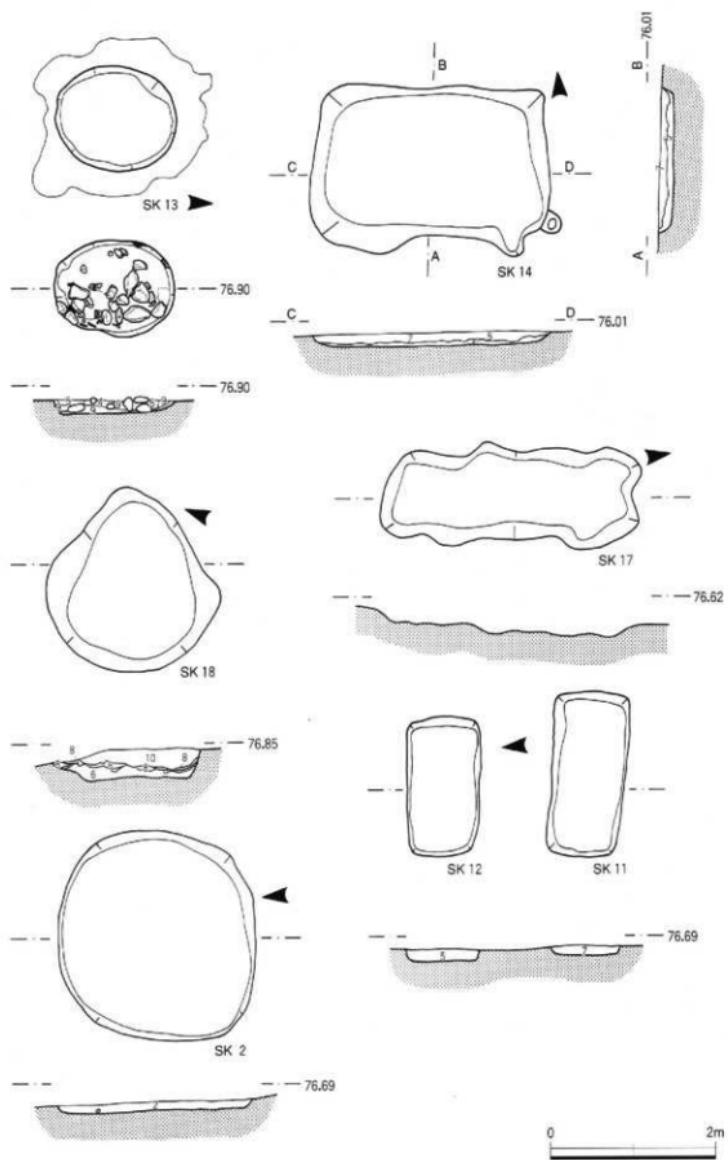
第8図 屋敷跡内遺構 (4) 横列1-1・1-2



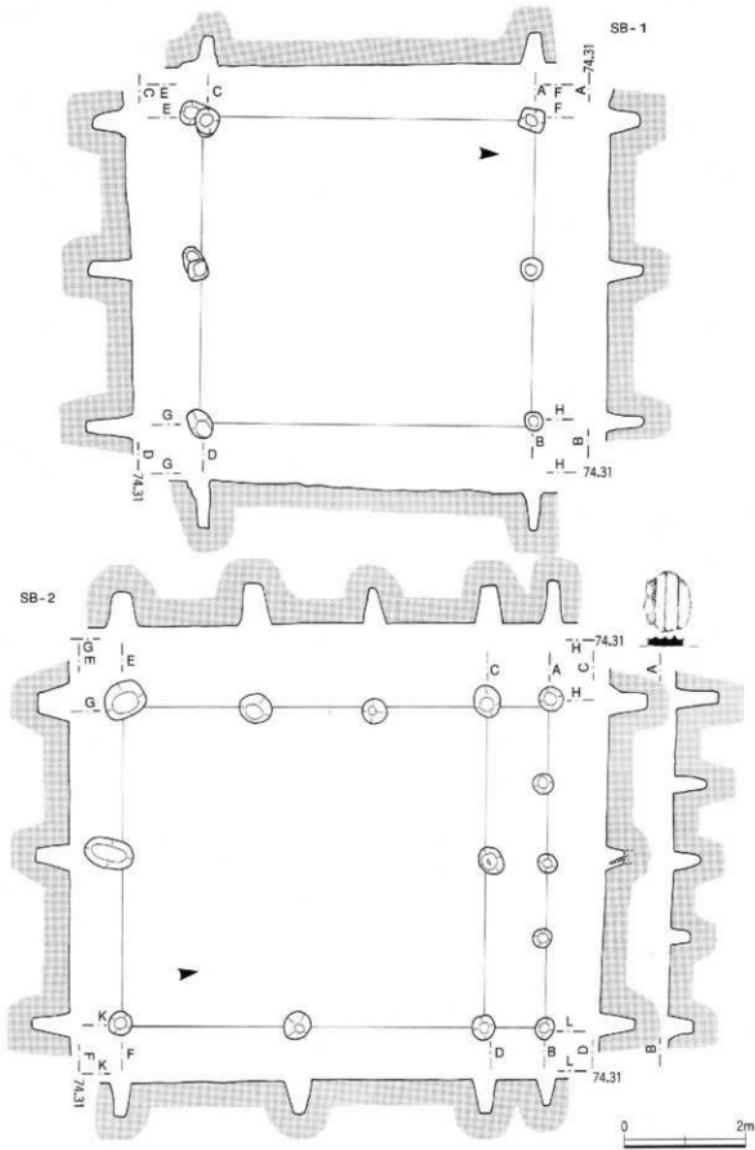
第9図 屋敷跡内遺構(5) 桁列付近建物跡1・2



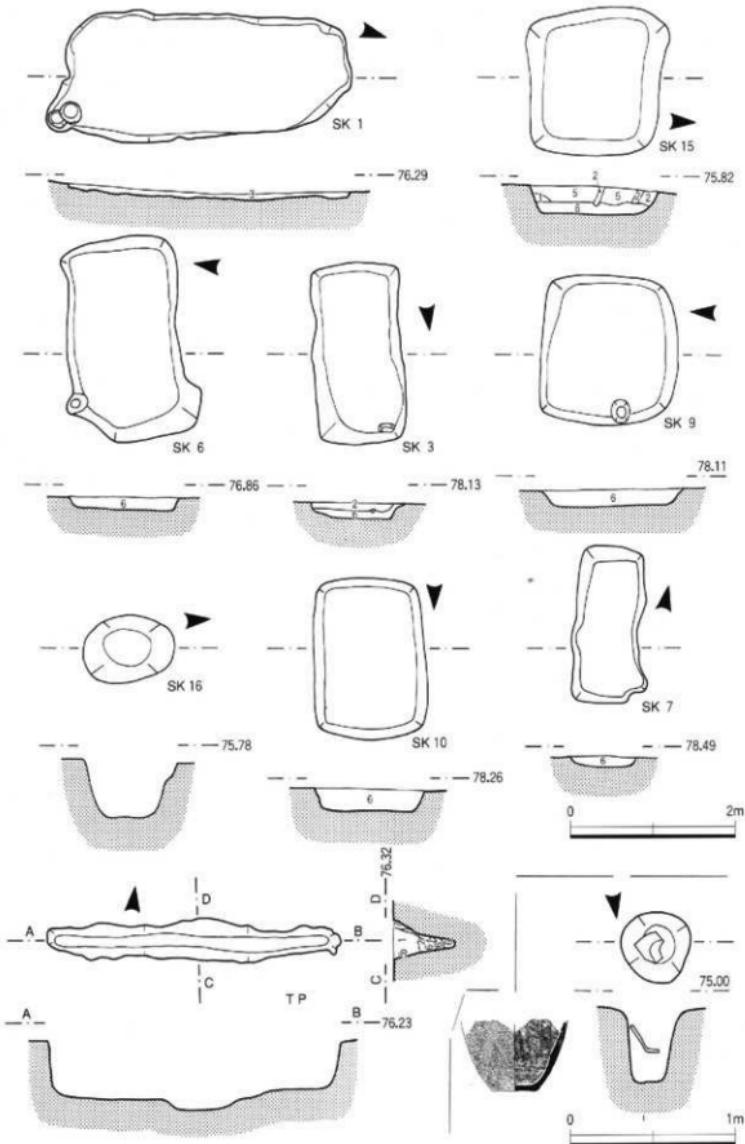
第10図 屋敷跡内遺構（6） 井戸跡



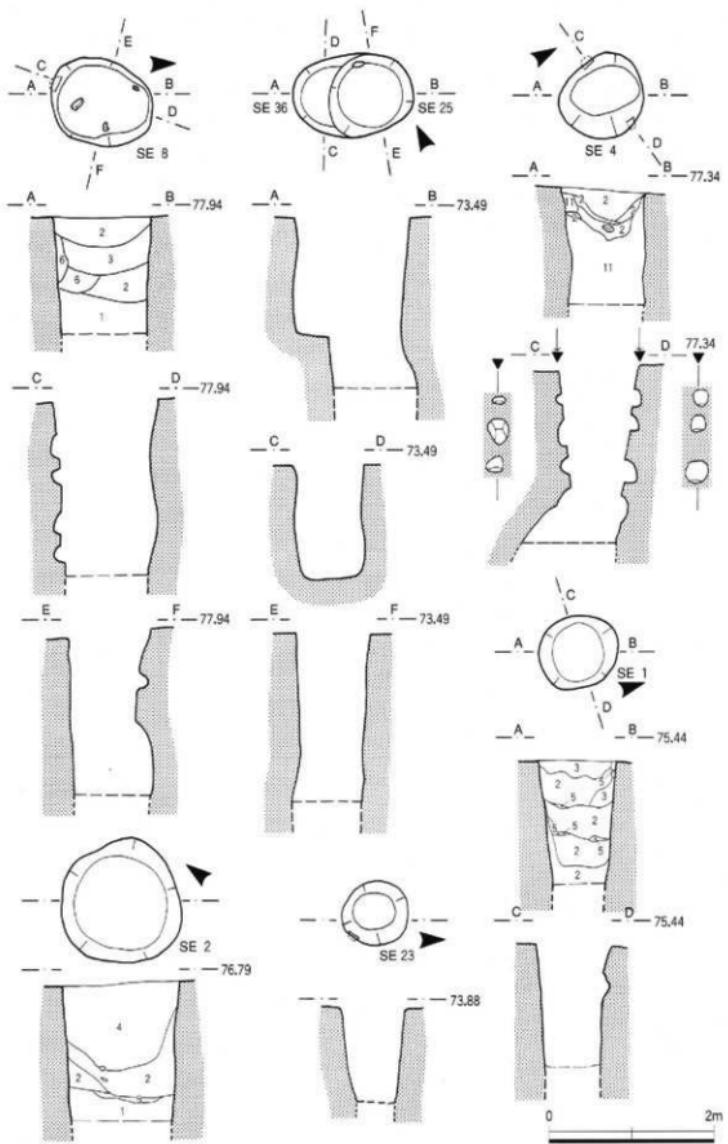
第11図 屋敷跡内遺構（7） 土坑



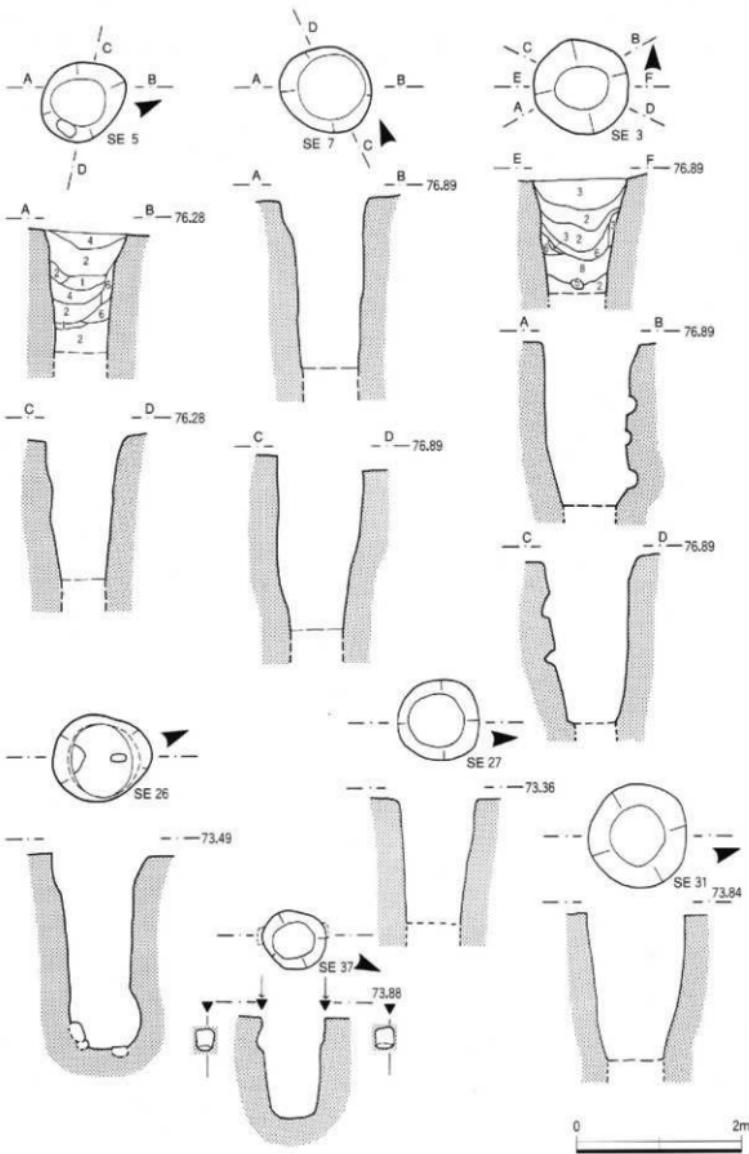
第12図 建物跡 第1号・第2号建物跡



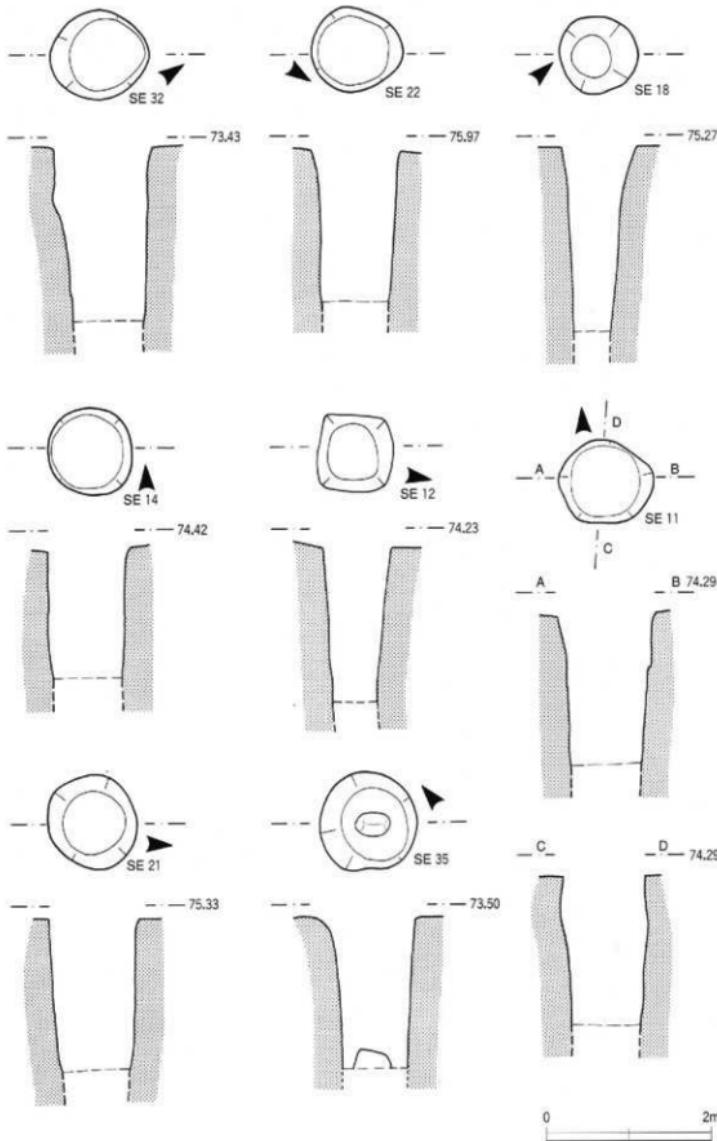
第13図 土坑、落とし溝



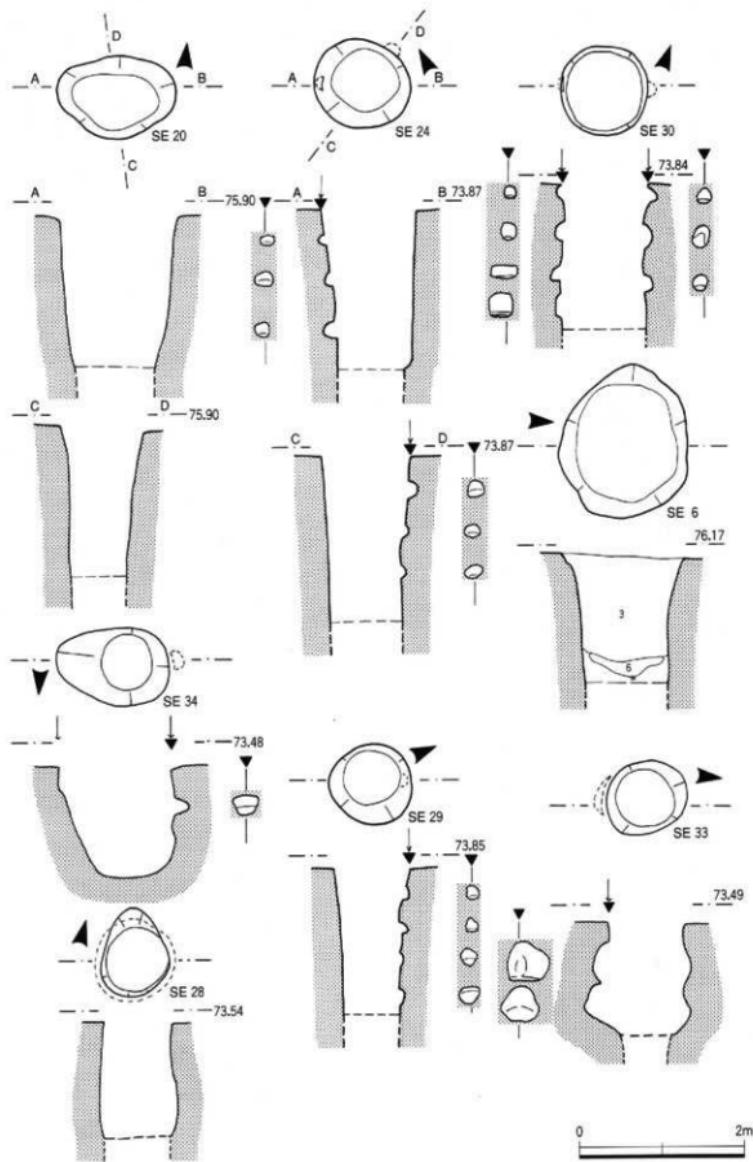
第14図 井戸跡 (1)



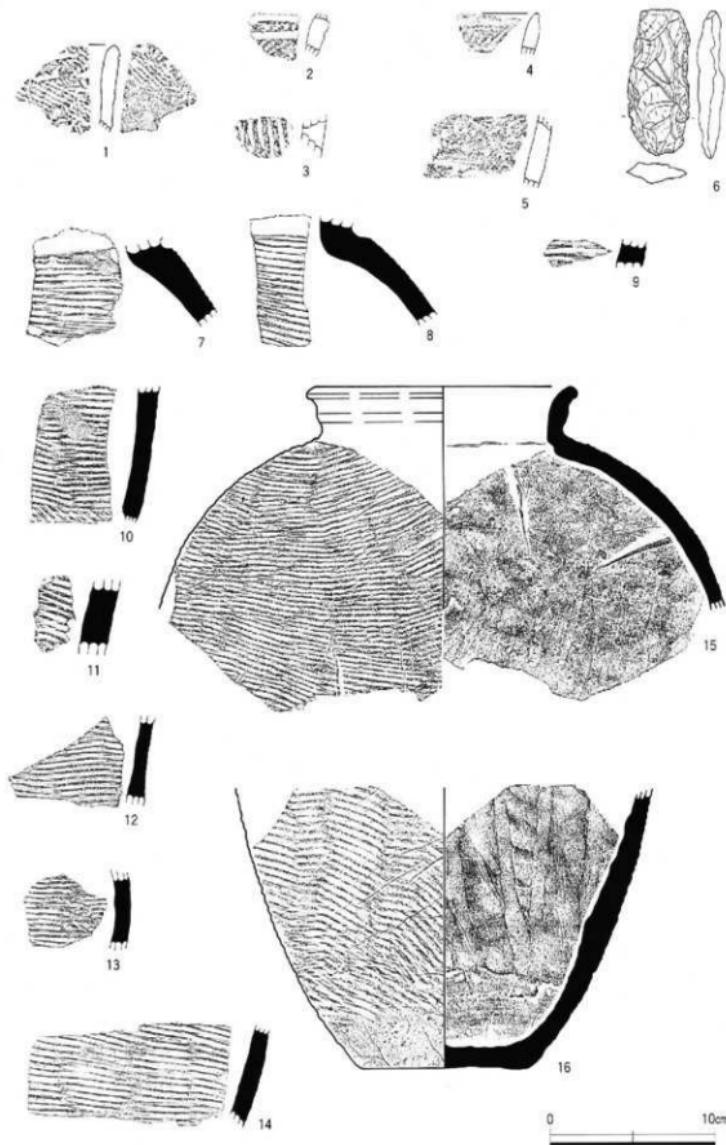
第15図 井戸跡 (2)



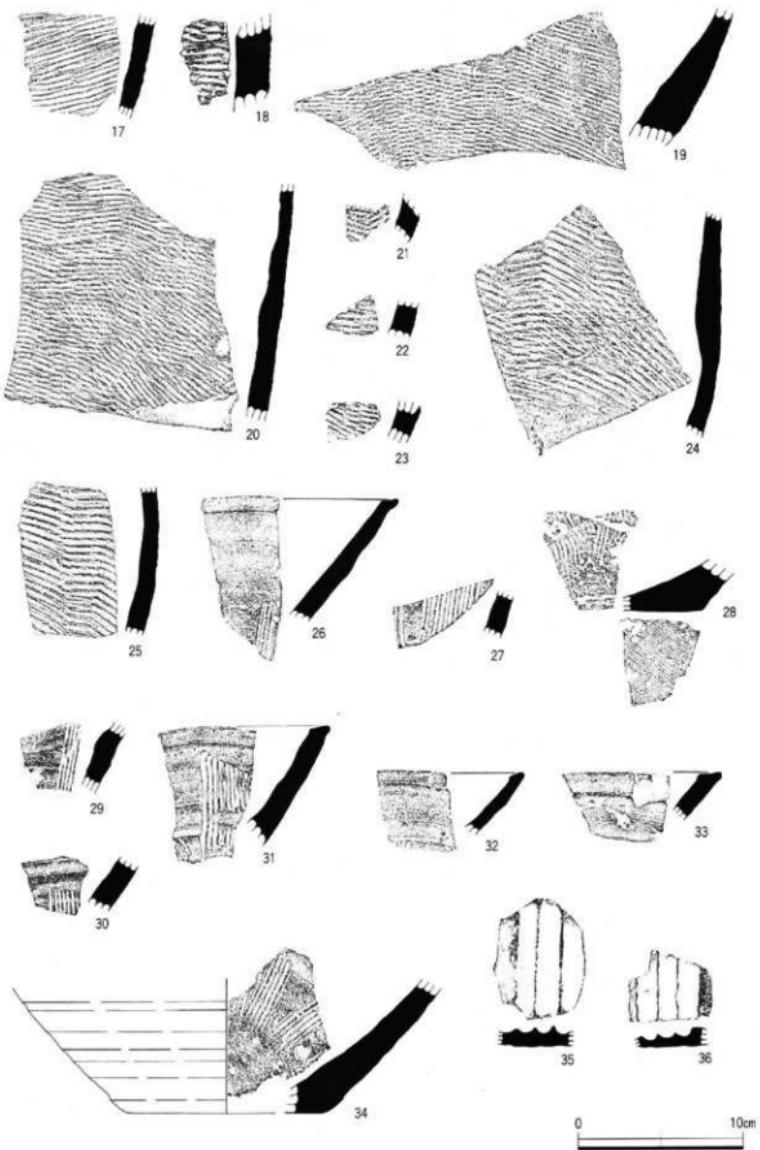
第16図 井戸跡（3）



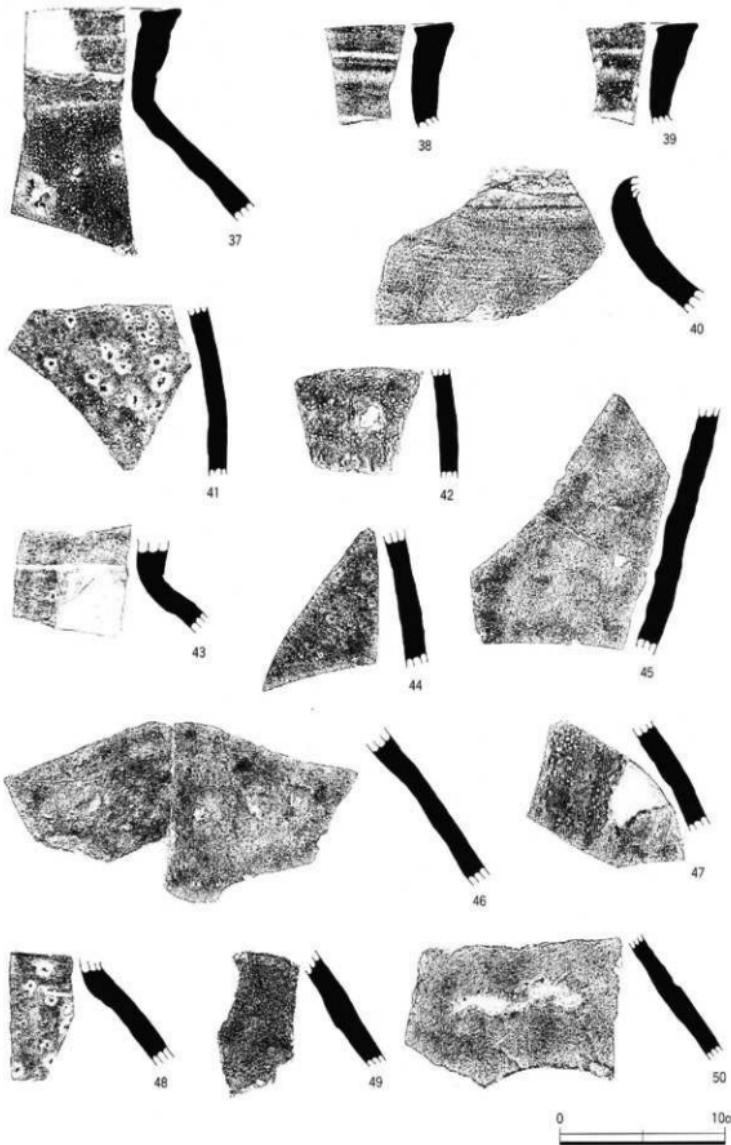
第17図 井戸跡 (4)



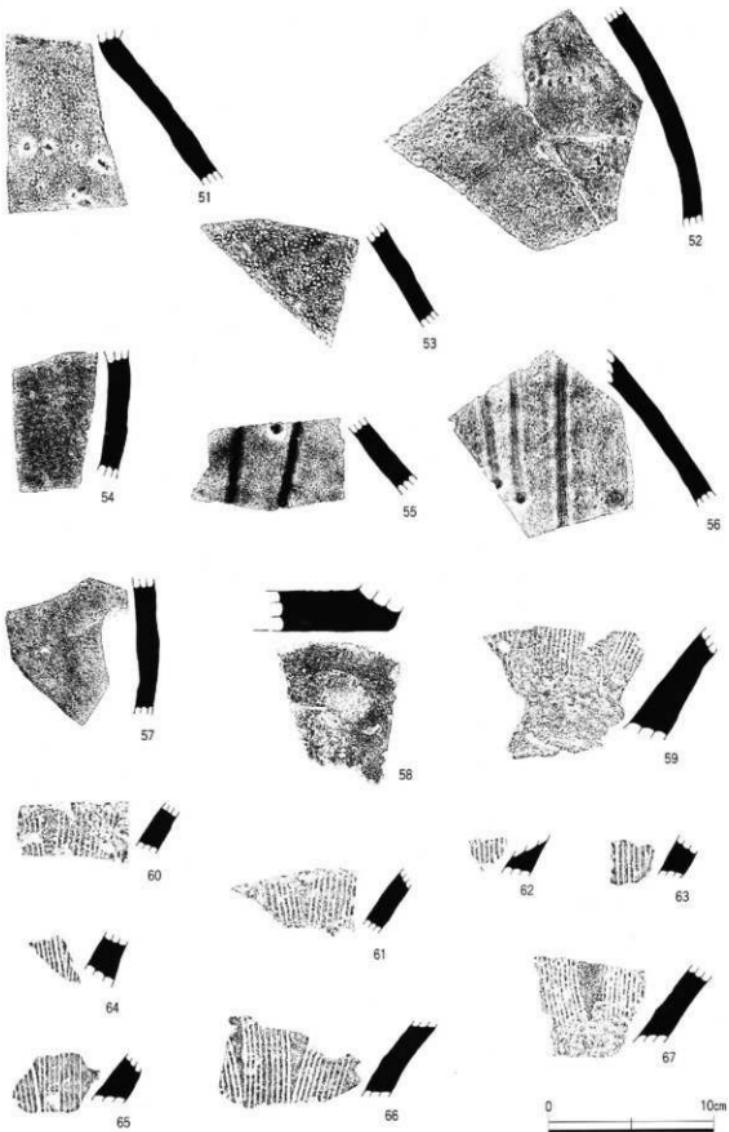
第18図 出土遺物（1） 繩文土器、打製石斧、珠洲焼（1）



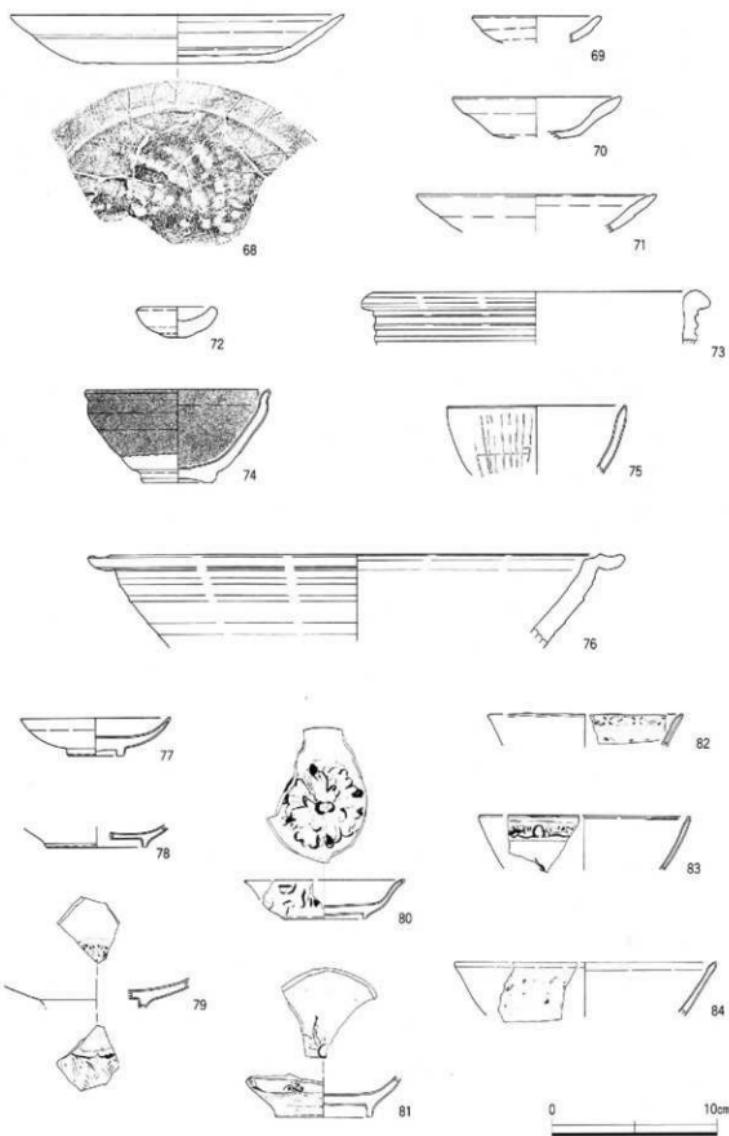
第19図 出土遺物（2） 珠洲焼（2）



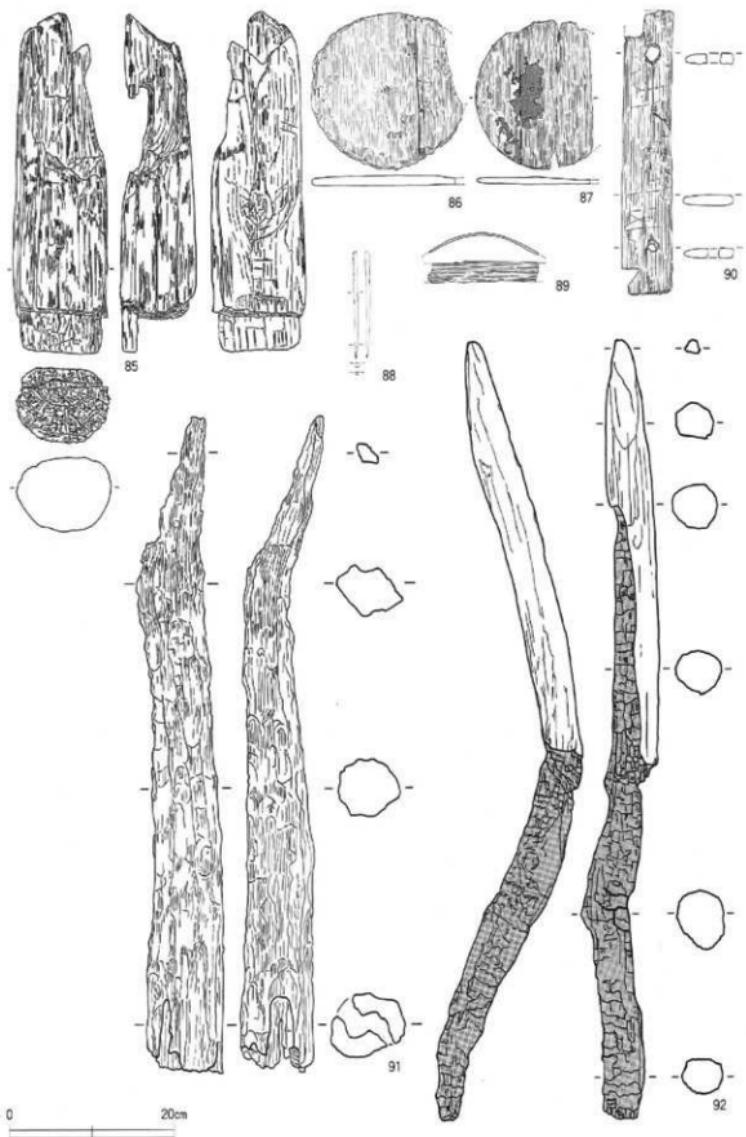
第20図 出土遺物（3） 越前焼（1）



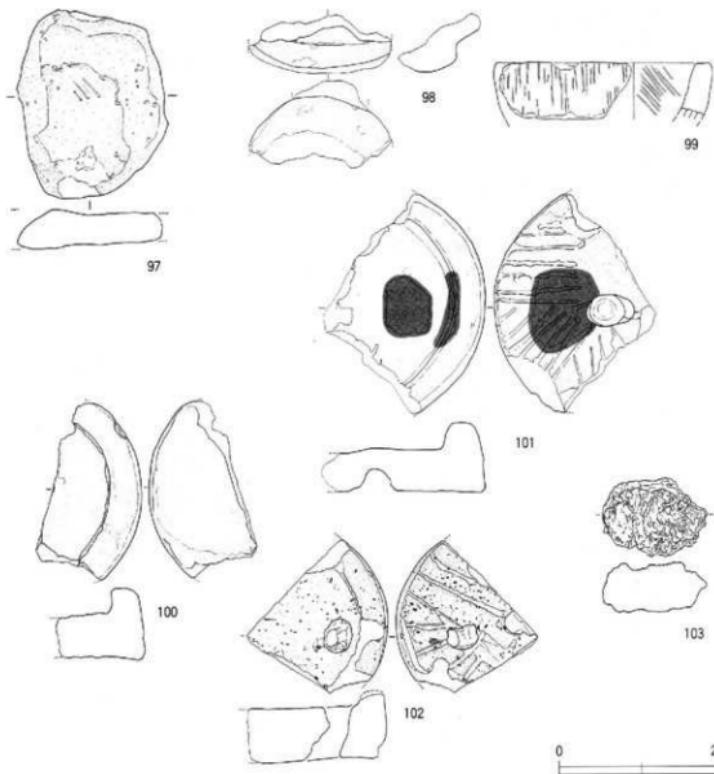
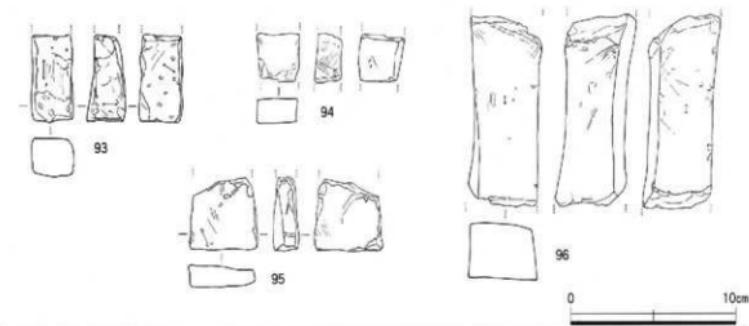
第21図 出土遺物 (4) 越前焼 (2)



第22図 出土遺物（5） 土師質土器、瓦質土器、天目、瀬戸・美濃焼、白磁、中国青花、染付



第23図 出土遺物（6） 木製品



第24図 出土遺物（7） 延石、石皿、石臼、鉄滓



西 上空から



遺構全体写真

写真1 ソデクネ遺跡空中写真

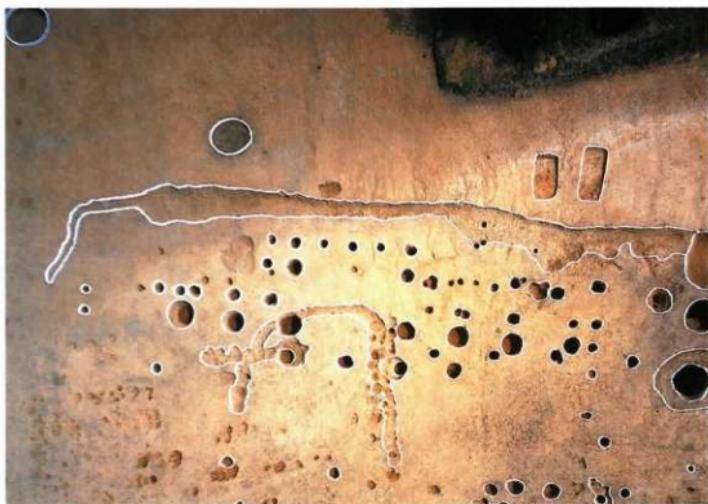


西 上空から



屋敷跡全体写真

写真2 屋敷跡周辺の空中写真



柵列付近

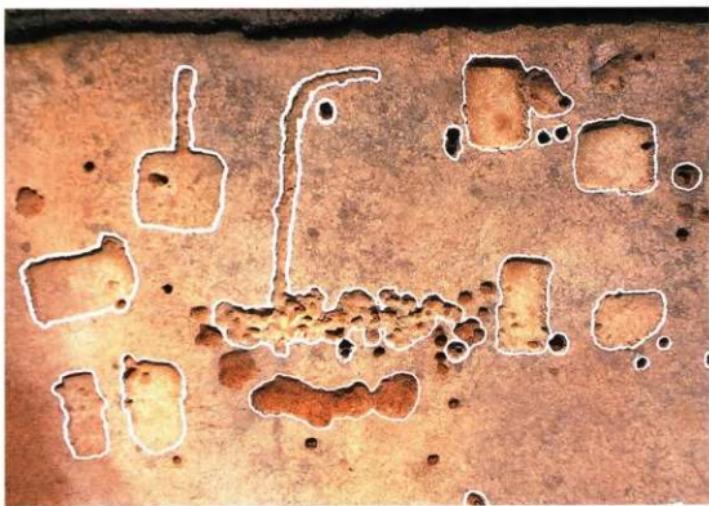


整穴状遺構

写真3 屋敷跡内遺構空中写真



星敷跡 2



土 坑

写真4 遺構空中写真



柄吉城跡



ソデクネ遺跡遠景 (北西から)



ソデクネ遺跡遠景 (北東から)



ソデクネ遺跡遠景 (東=普済寺から)



表土除去作業



遺構確認作業

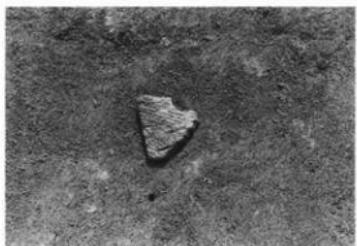


遺構発掘作業

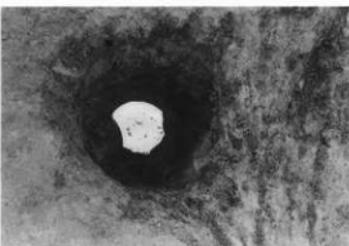


遺構発掘作業

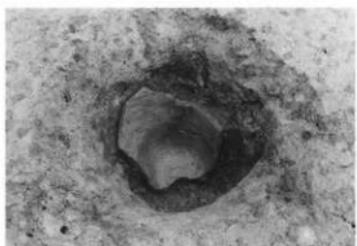
写真5 ソデクネ遺跡発掘調査



VWC-P66 縄文土器



VID-P40 出土の白磁



VD-P1 出土の珠洲焼



SD 19 出土の石臼



SK 13 発掘風景



SK 13 (断面)

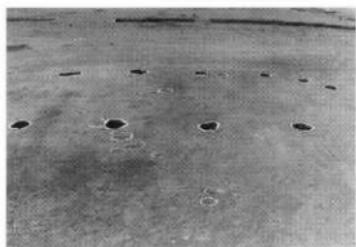


高筋小僧の状況



高筋小僧の状況

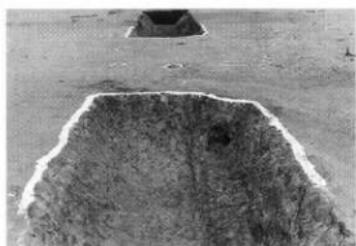
写真 6 遺物出土状況など



第3号 建物跡



柵列1



土橋



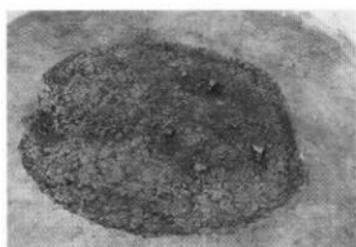
土橋と門?



竪穴状遺構



竪穴状遺構の発掘



SK 2 越前焼出土



SE 17

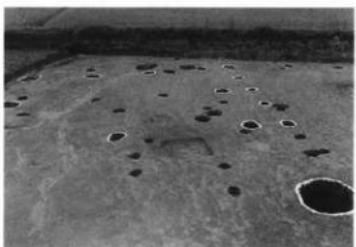
写真7 遺構 (1) 屋敷跡内遺構



落とし溝（平面）



落とし溝（断面）



第2号建物跡（平面）



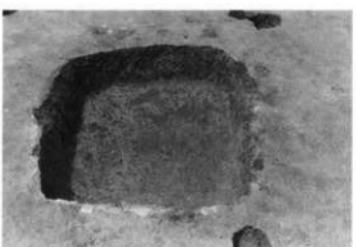
第2号建物跡（柱材検出）



SE 14



第1号 建物跡

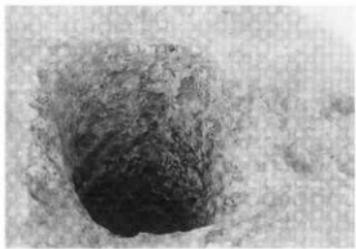


SK 15（平面）

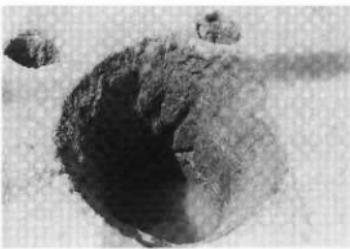


SK 15（断面）

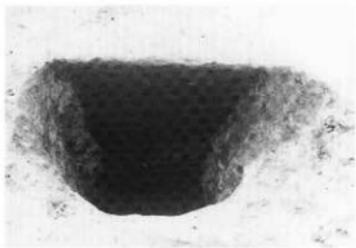
写真8 遺構（2）



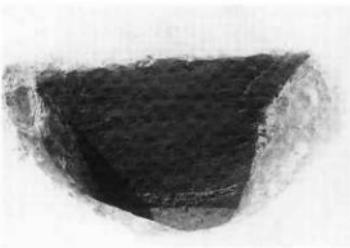
SE 5



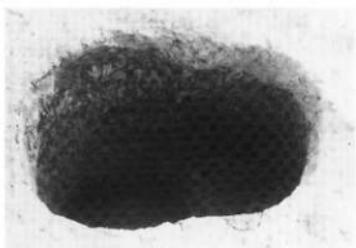
SE 6



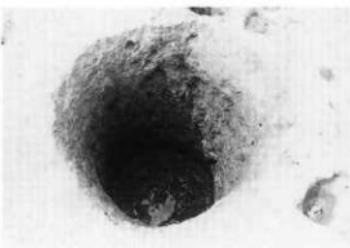
SE 5 (断面)



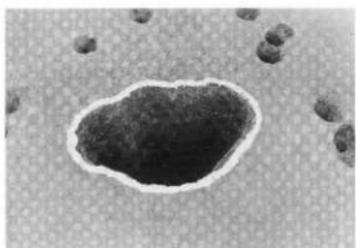
SE 6 (断面)



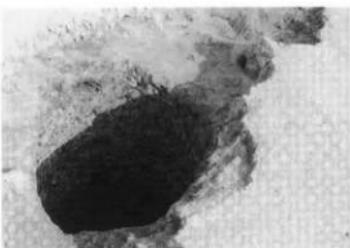
SE 25, 36



SE 2

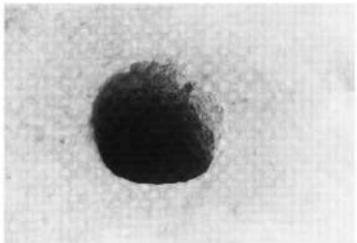


SE 20

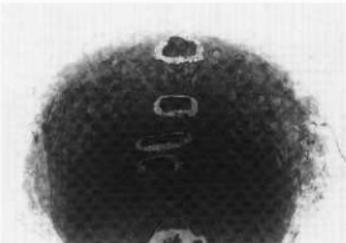


SE 7

写真9 遺構(3) 井戸跡(1)



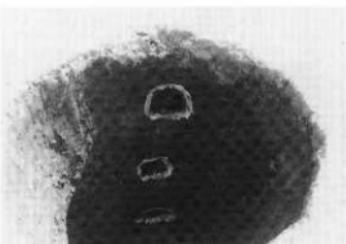
SE 30



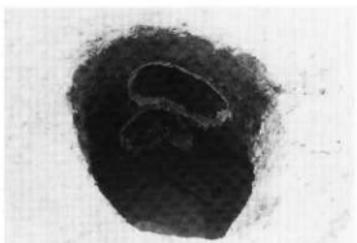
SE 30 東壁



SE 8 南壁



SE 24 東壁



SE 33 南壁



SE 34 東壁



SE 9 東壁



SE 9 西壁

写真10 造構（4） 井戸跡（2） 足架けのある井戸跡

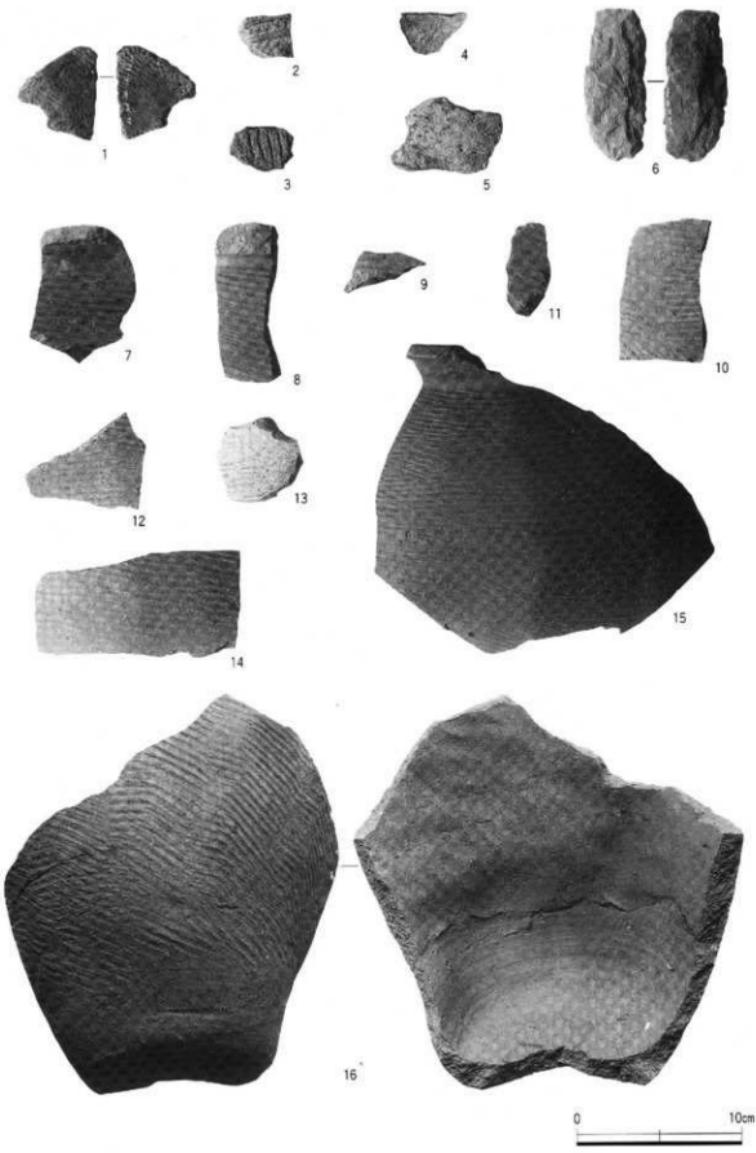


写真11 出土遺物（1） 繩文土器、打製石斧、珠洲燒（1）

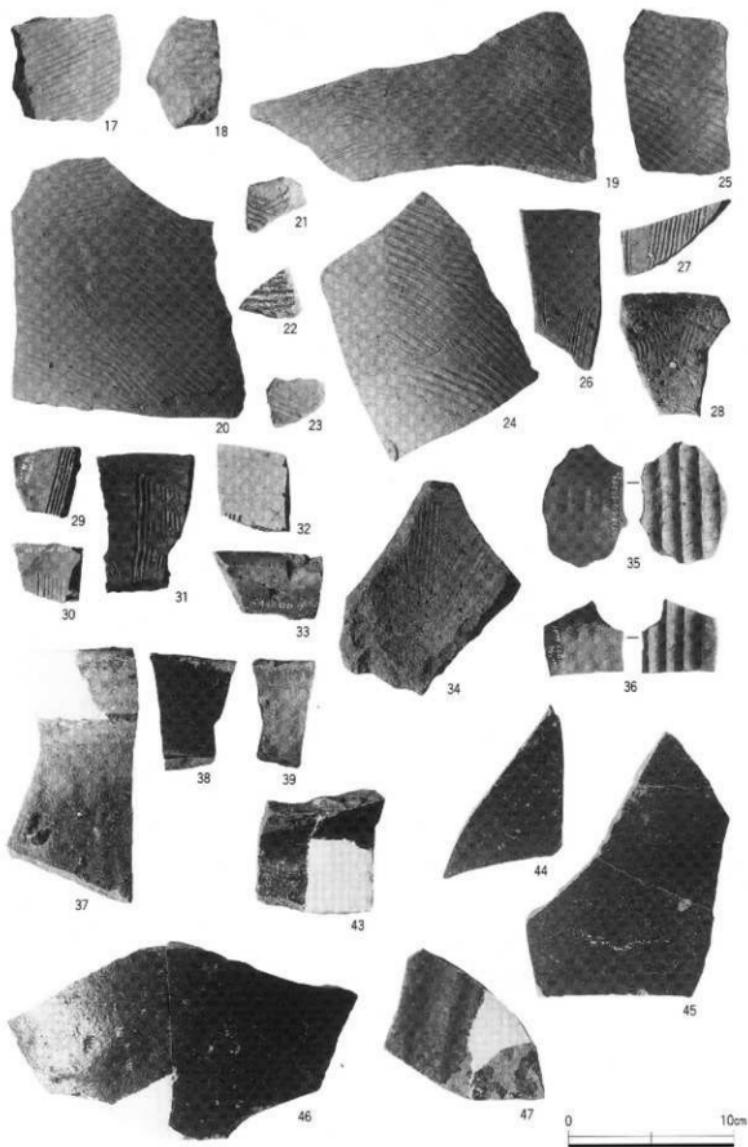


写真12 出土遺物 (2) 珠洲焼 (2)、越前焼 (1)

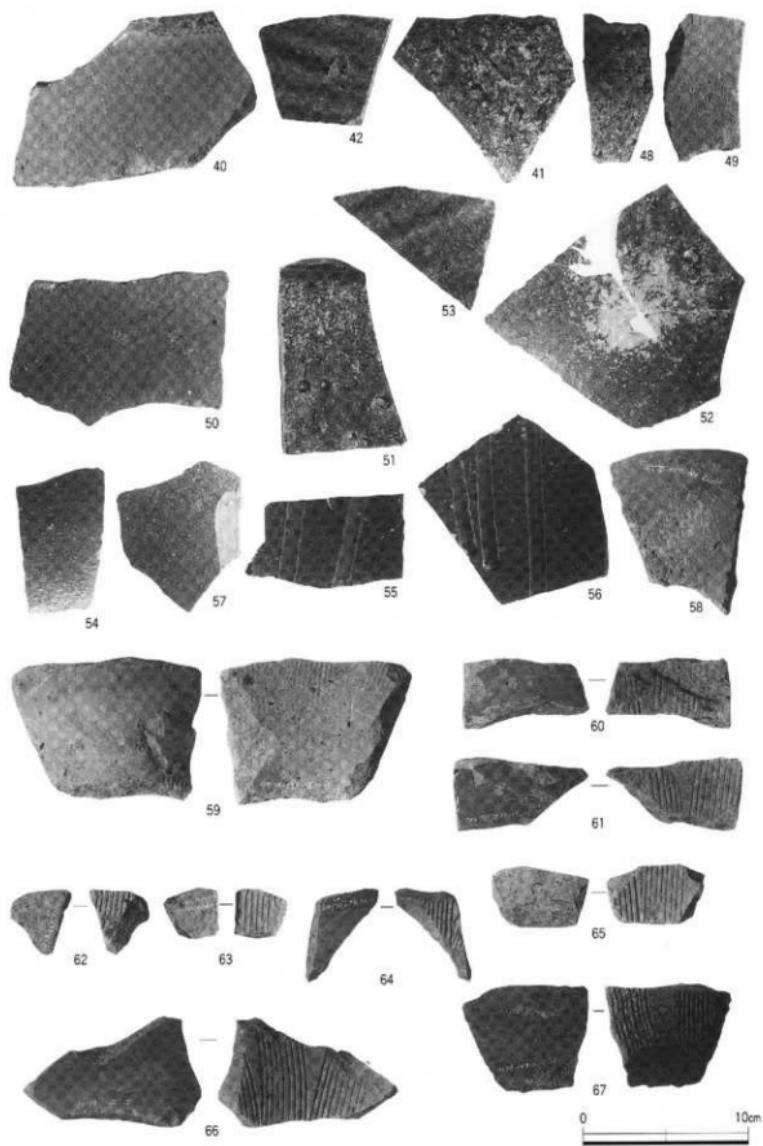


写真13 出土遺物（3） 越前焼（2）



写真14 出土遺物（4） 土師質土器、瓦質土器、天目、瀬戸・美濃焼、白磁、中国青花、染付

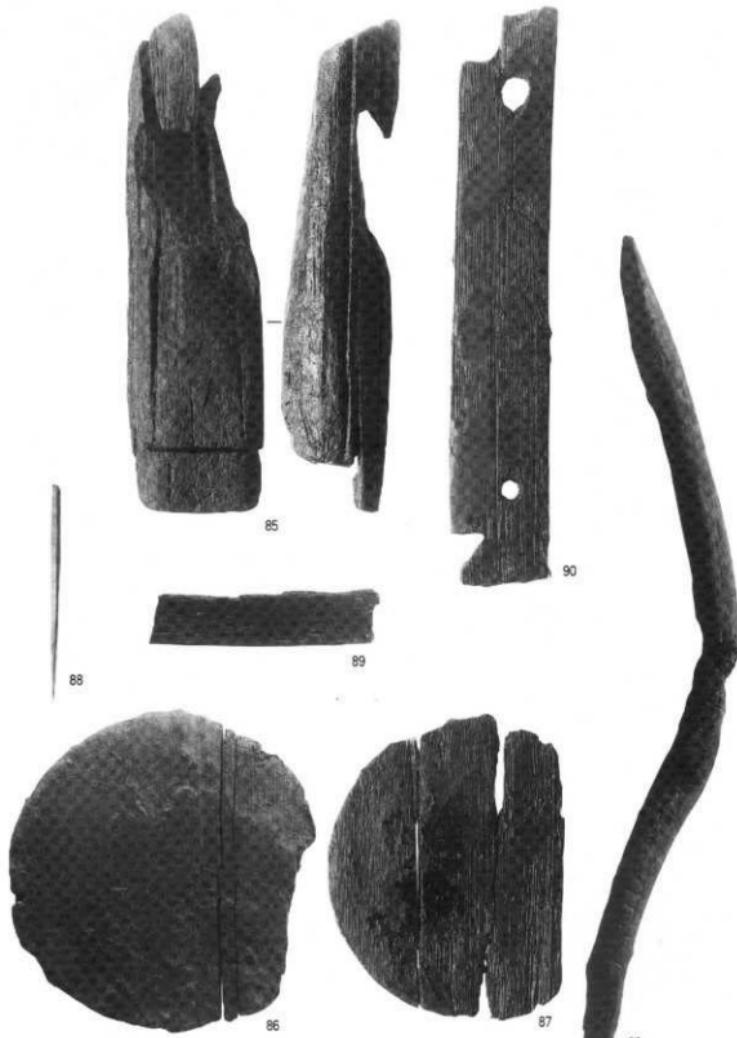


写真15 出土遺物（5） 木製品



写真16 出土遺物（6） 砧石、石皿、石臼

ソデクネ遺跡遺構図

S=1:200

N

